

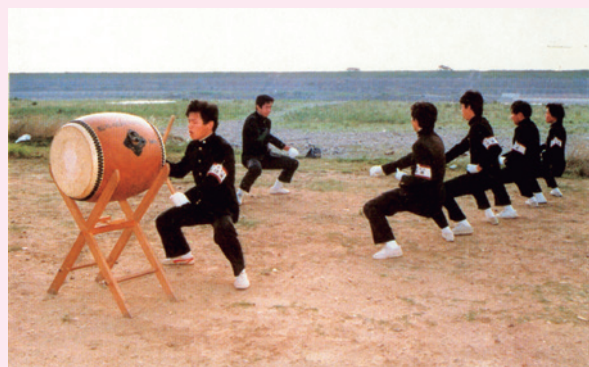
昭和57年卒業

卒業アルバムより





6



平成4年卒業

卒業アルバムより





平成14年卒業

卒業アルバムより



1



2



3



4



5





ブラボー 岐阜高校

昭和57年卒担当 英語科 江崎 正徳



二月立春の頃、昭和五十七年卒の卒業生から岐阜高校同窓会誌への寄稿依頼を受けた。平成三〇年度に、「往時を振り返って」と題する駄文を寄稿しましたとお断りするも、二年前（令和五年一〇月）の岐阜高校創立一五〇周年記念祝賀会でも見掛けたと説得される。恩師も高齢化して、寄稿文が集まり難い実情を聞くにつけ、長年お世話になった岐阜高校へのせめてもの恩返しと引き受けた。ついではながら、令和の時代になって、孫三人が岐阜高校同窓会の末席を汚す事となった。この事は望外の歓びとなった。

この年になれば、断捨離や終活などの言葉が脳裏をよぎるが、辛うじて当時のPTA会員名簿と卒業アルバムだけは、書斎の一角に保管していた。また、令和五年度発行の岐阜高校同窓会会員名簿も書架にある。

岐阜高校に奉職したのは、昭和五一年度から平成元年度までの一四年度の長きにわたった。年齢も三〇代前半から四〇代半ば迄と、多士済々の先生方から様々な刺激を受けながら、優秀な生徒諸君との出会い

もあり、教員生活の中で最も充実した時期でもあった。

英語教師としての経験は内心忸怩たる思いもあるが、当時を述懐したい。岐高の英語教育とえば、山貞と親単が双壁であった。山崎貞著の「新々英文解釈研究」はもう止めていと悲痛な叫び声が沸々と湧き上がったし、文脈無しの英単語の習得は労働として功少なしなどと懐疑心を抱くこともあった。上述の創立一五〇周年記念誌の一九八五年度（昭和六〇年度）のページにも「岐阜高校の『風物』：山貞に小テストに」と題する思い出話が載っている。想起起せば、進取の気性に富み、向学心に燃える生徒諸君に支えられての一四年間であった。

この頃から、中等教育学校の英語教育が大きな変革期を迎えた。外国人指導助手（AET）とのチーム・ティーチングが導入されたのもこの時期からであった。昭和五九年一月には、国立教育会館筑波分館で開催された文部省英語教員研修に参加する機会を得た。研修の主たる目的は、昔オーライの英文法と訳読式英語指導

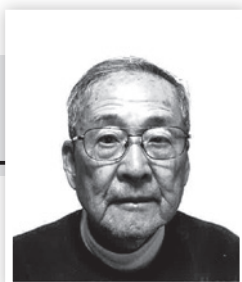
導法から抜け出せない英語教師にこの分館に約一ヶ月間寝食を共にしながら、研修を積ませる事であった。コミュニケーション手段として、英語のみの集団生活であり、研修者からは筑波プリズンと呼ばれていた。

更に、昭和六〇年の夏二ヶ月間、合衆国での英語研修に参加する機会を得た。八月二九日までの約一ヶ月間はブラウン大学での語学研修、八月三〇日からはローリング・セミナーと称する研修で、米軍東海岸の主要三都市を巡った。九月七日から一週間は、現地の教師宅にホーム・ステイしながら、ミルウォーキー市内の高校四校と肢体不自由養護学校を訪問して、各校の教育実践等について研修した。帰国したのは九月一八日であった。

この二度の長期研修を受講するに当たっては、岐阜高校英語科の先生方は言うに及ばず、全職員の皆様から御理解と御支援があったものと、この紙面をお借りして、改めて感謝の気持ちを述べさせていただきます。

追 憶

昭和57年卒担当 社会科 柴田 文彦



岐高で担任したクラスで作成した文集に投稿した。

「愚直」という言葉がある。自己の信念をことさら顕示することなく、いかなる状況も自己のものとして身に負い、不安に対決していく。身近な目標につまりきながらもぶつかっていく不退転の意志。気張りもせずにくつつと実践する行動力。この二つが合体したところに愚直がある。」

スイスで第五学年の授業を参観した。教師の質問に大多数の生徒が挙手している中で、一人取り残されたように手をあげていない生徒がいた。その生徒は自信が無さそうな表情を示しながらも、その目は真剣そのものであった。授業が進むうちにその生徒が指名された。一瞬ドキッとした顔つきになり、ただどしい応答をしたが正答ではなかった。前の席の生徒が後ろを向いて答えを教えようとして

いた。だが、この生徒はわき目も振らずにひたすら自分の力で正答を求め続けていた。教師も温かい目で見守っていた。焦りのためか早口になったり、詰まったりしていた。ようやく正答に達した時、女生徒はにこりと微笑んだ。私にはモナリザの微笑みよりはるかに印象的であった。

脚光を浴びる選手の陰に唇を噛んでいた生徒がいた。彼は「チームはインターハイに出られたのに、自分は何も貢献していない。悔しかった。選抜では必ず戦力になってやる」と決意した。監督は「戦力になるのは無理だろう」と思っていた。しかし彼は前にも増して努力した。毎朝七時半には体育館に来てシュートを打ち込んでいた。脚力をつけてディフェンスが格段にうまくなった。ここまで伸びるとは僕も正直驚いた」と言っていた。彼は選抜の一勝に少なから

ず貢献した。

岐高の倫社の授業で語った。

「実存とは今ここにどう生きるかに無限の関心を持ち、ありのままの自分を直視し、今この在り方を主体的に決定していく存在である。あれかこれかの選択。そこに自由があり不安が生まれる。」

準決勝で怪我をした選手に医者は言った。「足の骨が折れている。明日の試合は無理だ」と。しかし彼は決然と答えた。「僕は出ます」と。激しい雨の中、ペナルティストローク戦で、キーパーの彼は二人目のシュートをはじき出し、激闘に自ら終止符を打った。

これらの追憶の中に、抽象と具体の世界がオーバーラップしているのを垣間見た。

千仞の嶽金華山百里の水長良川

平成4年卒担当 国語科 石原 克己



教職生活を振り返ると、思い出す風景には濃淡があり、その輪郭さえ定かでないものが多い。だが、岐阜高校での三年間は格別である。既に三十数年を経ているが、むしろ、年を重ねる毎にその色や香りは、一層芳醇にさえなっている。学校生活は勿論、地域の暮らしも取り巻く風景も、何もかも新鮮で刺激的であった。岐阜での三年間は私の宝物である。

宝暦年間の木曾三川治水工事を成し遂げた、薩摩義士の偉業を機縁として、昭和四五年に教員相互派遣交流が始まった。翌年姉妹盟約が結ばれ、現在まで続いている。児童生徒の自主活動を最大限に生かす、岐阜の教育に学ぶとともに、鹿児島教育を外から見る機会を得ることができた。

岐阜高校には、平成元年に赴任した。全国屈指の伝統校・名門校として、独自の校風を堅持していた。豊かな人間性と創造的英知を兼ね備えた青年への、成長を目指す教育がなされていた。生徒達は、自由な雰囲気の中で、勉強は勿論、生徒会活動・部活動・学校行事にと、生き生きとした高校生活を送って

いた。帰任後、教諭・校長として異なった視点から考える時、事例を岐阜の教育に求めることも多かったように思う。

特色ある行事の一つに、北アルプス西穂高上宝村の「林間学舎」があった。飯盒炊飯、キャンプファイヤー、作品制作、西穂高登山が行われた。「健全な心身と円満な情操を培う人間形成の場」として活用されていた。星空の美しさも格別であった。また、京都・尾道・宮島そして大久野島での自主活動を含めた修学旅行、全力で取り組み活気溢れた岐高祭等々。岐阜高校での体験は、どれもこれも素晴らしい印象深いものであった。二期制が導入されていたことも目新しいことであった。

「生徒課」に席を置いた。伊藤生徒指導部長にはいろいろお世話になった。現在も声を掛けていただいている。大竹先生・窪田先生にはよく助けていただいた。大きなストーブが印象に残っている。国語科の先生方には、試験問題作成や研究授業等、教えていただくことも多かった。歌舞伎座に出かけたことも忘れられない思い出であ

る。職員朝会が無いことや管理当番の制度、入学式や卒業式の紅白の幔幕、「三ッフル」や「押しピン」が通じなかったことなど、まごつくことも多かったが、楽しい岐阜高校での生活であった。

三年間担任をさせていただいた。よく質問をした福留君、祖父が同郷と分かった西園君、テニスの上手な小林君、部予算交渉に奮闘した野田君、アメリカから便りをくれた桐野君、交流教員として鹿児島に赴任して来た河口君等々、多くの生徒の顔が浮かんでくる。自由で伸び伸びとし、気概に溢れ、才能豊かな生徒たちばかりであった。それぞれの世界で活躍されていることを確信している。

「春の別れは楽しいものよ 春に初めて会ったじゃないか 君の任地は遠くはあるが どうか達者で暮らしておくれ そしてたまにはたずねておくれ」送別の宴で、大宮義章校長から頂いた言葉である。平成一八年、岐阜を訪れる機会があった。金華山も長良川も、そして「岐高」も変わらずそこに輝いていた。

旧校舎の思い出

平成4年卒担当 数学科 田中 彰

私は岐阜高校には、平成元年度から平成七年度まで勤務しました。今はもう旧校舎の面影はありませんが、そこで送った生徒のみなさんや先生方との学校生活は思い出されます。

当時の校舎は土足で、雨が降ったりグラウンドで学校行事があったりすると廊下が靴の泥で茶色くなりました。ただ本館の正面玄関の階段だけは来客用のため生徒通行禁止で、妙に威厳を保っていた記憶があります。

体育館も新体育館と旧体育館があり、特に旧体育館は歴史を感じさせる雰囲気がありました。部活動をするには天井も低く手狭な旧体育館でしたが、当時、部活動の指導に来校されていたスポーツ店の社長さんが、昭和三〇年代に体育館を訪れた際はとても大きいと感じたと話してみえました。

部活動では、バドミントン部の顧問をして部員相手に試合をする日々を送っていました。自分も競技経験者でまだ社会人の大会に出場する元気があったので、生徒の競技力も向上し、県大会に出場で

きるようになり、中学時に県の上位にいた選手が入学してからは、東海大会にも出場できる部になりました。先述の社長さんは、他校の生徒が一週間かけて身に付ける技術を、岐阜高校の生徒は一日でできるようになる、勉強もスポーツもつながっているんですね、驚かされていたことを覚えています。

担任した生徒や授業を持った生徒も、今に比べると個性的でした。当時はまだ受験戦争真っただ中で、学習面での競争も激しかった時代でしたが、性格の差異で一時的な意見の対立はあっても、いじめにつながった記憶はありません。自分の考えと異なる意見や多様な人格を許容できる人間性が、岐阜高校の生徒には当時からあったと感じています。

平成八年三月に岐阜高校を離任しましたが、その後の勤務校や県教委で、岐阜高校でお世話になった先生と再び勤務したり、岐阜高校での教え子が教員や県職員になって再会したりするなど、たくさんさんの繋がりができた岐阜高校で

した。

現在は、公立高校を退職し、私立高校で数学を教えながら暮らしています。黒板やチョークは学校から消え、パソコンの画面を投影したホワイトボードに、マーカーでメモをかくICT活用授業になりました。岐阜高校の勤務時からパソコンで成績を処理し、その後もICTに関わる仕事をしていたので、やっとこの時代がきたかと楽しく授業をしています。

大学入試も様変わりしました。知識偏重型から課題解決型の出題に変化しています。これは、答えが一つに定まらない時代、誰にも答えが出せないのに前に進まなければいけない時代を生きるための力が必要とされているからです。知識だけで解決する仕事ならAIがやってくれる時代です。

卒業生のみなさんは仕事や家庭で、社会の中核となり、あるいは将来の日本を背負う人材や子どもたちを育ててみえることと思います。益々のご活躍を祈念します。

華陽の健児

平成14年卒担当 数学科 秋場 毅



「水かぶらせていただきます！」

一月一八日朝刊で、大学入学共通テストを前に毎年行われる恒例の「水ごり」の記事を目にし、以前と変わらない風景や掛け声に、懐かしさや何故か安堵感を抱いた一方、記事写真中の水をかぶる応援団長が女子生徒であることに、驚きと時代の流れを痛感した。

この記事の約ひと月前に、平成一四年卒業生と会う機会があり、応援団員を三年間務めてくれた卒業生と、入学早々、応援団員を各クラスから選出する際の苦労話や林間学舎での思い出などを語り合い、楽しい時間をすごさせてもらった。

そして、この寄稿文の依頼を正式に依頼されたのは、記事を目にした翌日一九日、大学入学共通テスト二日目だった。応援団と共通テストに、この寄稿を導かれたような思いで、今、筆を執っている。

「全員立てー！」

着任して最初の集会で、この掛け声に度肝を抜かれ、新入生と共に体育館で直立不動となった平成

一〇年春のことを鮮明に覚えている。

教員八年目、初めての異動(前任は多治見北高校)であり、岐阜高校の生徒諸君に耐え得る授業ができるのか不安で仕方がなかった。そのため、毎日の予習や教材研究はもちろん、同じ数学科の先生方と競うように週末課題や実力テストの問題作成、課題講座の準備などに懸命に取り組んだ。

と同時に、勉強だけでなく部活動や学校行事にも全力で励む生徒諸君に負けないよう、掃除終了後、これも数学科の先生方と競うように更衣室に向かい、部活動の準備をし、それぞれグラウンド、体育館で部活動に励む日々であった。林間学舎や岐阜祭、生徒個々の思い出など様々あるなか、こうした日常が鮮明に思い起こされ、これが自身の教員としての礎となっている気がしてならない。

現在、学校現場を支える立場である岐阜県教育委員会に所属し、足掛け一〇年を終えようとしている。少子化の進行は岐阜県でも顕

著であり、中学校を卒業する生徒数は、一五年後(零歳児)、現在の約四割減となることが見込まれている。同時に社会は、国際情勢の不安定化や気候変動、絶え間ない技術革新等、目まぐるしい変化を続けており、将来の見通しが困難な時代となっている。こうした中、本県では「第四次岐阜県教育振興基本計画」を策定し、教育を取り巻く新たな課題や社会情勢の変化に柔軟に対応し、教育を推進していく指標としていところである。

今回、こうして寄稿するにあたり、一五〇周年記念誌の頁をめぐった冒頭、自分が大好きな校歌の解説が興味深かった。在校生や卒業された皆さんには、先に述べた困難な時代をしなやかに、より良く生きていけることを祈念するとともに、「心雄々しく」、「国家のために明け暮れ学ば」気概を持った『華陽の健児』の活躍に期待して止まない。

三年間の思い出を振り返って

平成14年卒担当 英語科 高橋 誉



原稿の執筆依頼をいただき、せっかくの機会だからと引き受けたものの、当時からうまく思い出せない。なんせ、二〇年以上前のことである。昨晩の夕飯の内容さえ覚えられないお年頃になってしまった私には酷だ。そこで、卒業アルバムを脇に置き、平成一四年卒業生の皆さんが当時の社会情勢なども振り返りつつ思い出せるような内容にしたいと思う。私が岐阜高校に在任したのは平成六年四月から平成一四年三月の八年間。赴任当時を振り返ると、飛騨地方の普通科高校から転入してきていきなり三年生を担当させられた。自分より明らかに賢く語彙力のある生徒がクラスの半分くらいいる中で、授業の予習ができていないと夜中でも目が覚めてそのまま朝まで授業準備という日々だった。同僚の先生はそんな私に「誉さん、うちは誰が教えてもそんなに成績は変わらないから大丈夫。」と励まされた。実際、私の教えるクラスの成績はそんなに遜色はなかった。それほどに生徒の「自分で学ぶ」姿勢ができていたように思う。さて、話を平成一四年卒業生に戻そう。

一年次、ミレニアムに変わる世紀末の年には、一年生恒例行事の林間学舎に行きました。当時は三泊四日の日程で西穂高岳登山がありました。独標まで登る猛者もいました。不便をそれほど不便とも感じず、ゆったりとした時間の流れの中で、級友との親睦を深めました。今でも、保護者の有志の方々が事前の掃除などをされて、日程は変わりながらも続いています。この岐阜ならではの行事をこれからも引き継いでいってほしいです。

二年次、コンピュータ二〇〇〇年問題も乗り越え、「IT革命」が流行語になったこの年、シドニーオリンピックで岐阜県出身の高橋尚子さんがマラソンで金メダルを獲得しました。この年の冬、修学旅行でスキー研修に行きました。ワイドビュー信濃とバスを乗り継いで志賀高原に行きました。引率としてはとても楽でして、スキーのインストラクターに指導をお任せで、教員は自由に滑ることがができます。スキー初心者で立つことさえままならなかった生徒たちが最終日は、一列で綺麗なシニールを描いて滑る光景は感動的でさえありました。一つ難点は、ちやうどインフルエンザが流行る時期

で、罹患した生徒をタクシーで街まで送ることが頻繁にありました。今では、スキーはおるかボードさえ下火で、修学旅行も長崎が行先になりました。

三年次、二〇〇一年は、九一一アメリカ同時多発テロ、日本でも大阪の池田小児童殺傷事件と衝撃的な出来事が起こりました。最終学年は、全ての行事に全力であたりました。その中でも文化祭と体育祭は、大いに盛り上がりしました。私のクラスは「ガチンコ」というビデオ作品に取り組みしました。編集のクオリティが秀逸でした。生徒にも負けず劣らずで、職員劇や職員バンドがあって、生徒も職員もどちらも楽しんでいる雰囲気最高でした。

最後に、自分のクラスのことについて言及することを許してもらえとすれば、クラス担任として十分なことをしてあげられなかったという思いが二〇年以上たった今も胸の奥に澱のような形になって残っています。今ではほぼ四十路となり十分に大人となった平成一四年の卒業生の皆さんに、「いくつになってもしなやかに強く生きてください」とエールを送り、私からのメッセージとします。

馬鹿の人生―その後

昭和57年卒
赤尾 幸俊

昭和五五年
一〇月九日、岐
高祭最終日の弁
論大会で、馬鹿
の人生という題
目で最優秀賞を
いただいた。こ

の弁論で私は、「馬鹿」とは一つのことをとことんやり通す人間を指していて自分は一生馬鹿を通し真の馬鹿になりたい、と論じた。その時私は二年生。それから四四年余り後、その馬鹿がどうなったかをご報告する。

一、半年後に、無謀にも生徒会長に立候補して多分調和を乱しつつその座に就いた。

二、大学では体育会常任委員会の委員長を引き受けてしまった。

三、卒業後の進路で、理系で教員になろうとしていたのに証券会社に軽い気持ちで入社してしまった。

四、入社後コンピュータ関連の仕事をしていたが自分は金融マンになるんだと社内の海外留学生に応募するも、撃沈。その後、何とかロンドンで銀行の法人営業職を獲得。しかし九〇年代後半の金融危機の中銀行閉鎖のため帰国。

五、帰国後の配属先が米系との合併化となり社内は米系モード。会社は無理が祟ってお上からお灸を据えられ、その後処理計画を実行する役目に。

六、その米系もリーマンショックで日本の事業を解体する中、残った事業に誘われてついていた。が、数年後、今度は日

本でのリテールから撤退のため自分のチームも縮小のプレッシャーに。

七、苦しんでいる時に元の同僚から声がかかり、大手資産運用会社のＩＴグローバルヘッドに。その後は定年でＩＴヘッド明け渡しとなり、自らは支え役として残り、今に至る。

八、当事者でもないのに、東京で活動する外資系金融機関のＬＧＢＴＱ＋当事者とアライのネットワークの取りまとめ役を引き受け。会社内でも草の根グループを立ち上げ。

ここまでの半生、苦しいこともたくさんあったと思うが、馬鹿な生き方を貫いてきていたんだと思い返している。もとよりノーベル賞学者になろうとか、会社経営者になろうとか、自分の事業を起こそうとかあるいは世のため人のためになろうとかは考えておらず、ただただ半世紀ほど前の日本が世界の頂点に見えていた時からこの先日本は経済的にどう発展していくんだろう、それを観察しながら自分は生きていく糧を得られさえすればいいと考えていた。

何事にも誠実で嘘をつけない人間がメンタルにもフィジカルにも病むことなく今に至れたことはよかった。そしてその間に多くの金融やＩＴの知識を学び、また途中から磨いた英語コミュニケーション力のおかげで様々な属性の方々仕事をし、米系に勤める中で学んだ、今でいうサバントリーダーシップを実践でき、少ないながらも共感いただける方々にも巡り会えた。私は幸せな半生と感謝している。

五十歳から始めた仕事

昭和57年卒
五十嵐美紀

昨年は在京岐阜高校昭和五十七年卒同窓会に出席。卒業以来四十三年ぶりの同級生達との再会で、還暦過ぎても積極的に活動されている皆さんから沢山のパワーを頂きました。

さて、私はいま俳優やモデルの仕事をしています。大学在学中に結婚し、以来ずっと専業主婦でしたので、五十歳位になって初めて家庭以外の世界に飛び込んだわけです。それまで子育て中心の生活で、子ども達をしっかりと教育して社会人として役立つ人間に育てる事はとても大切な仕事だと自負していました。ところが当時進路について話をしていた高三の息子に『お母さんは何の能力もないから専業主婦をしているんだね』と言われてしまったのです。必死に子育てしてきた私はショックを受けました。それまで誰かの人生を支えているだけで、私自身の人生を歩んでいなかった事に改めて気が付かされた瞬間でもありました。では私のやりたかった事は何か？模索し始めたのはそれからでした。

その後、着物を着る事に夢中になり、着物で街を歩いていたら何度か声を掛けられ、それが今の映像の仕事始めるきっかけとなりました。最初は着物が仕事に

繋がれば嬉しいかも……くらいに思っていましたし、何事も新鮮でしたのでエキストラの様な仕事も一年程やっていました。でもその時ある方に聞かれたのです『あなたはどうしたいのか？』私は学生時代、映画研究会に所属していたほど映画好きでした。人に感動を与えられる映画やドラマの仕事がしたい！そんな夢を持っていた事を思い出し、映像演技を学ぶため、演技スクールに通い始めました。今から十年程前の事です。十～三十代の人達に混じって、文字通り五十の手習いで、出来ない事ばかり。数年間は悔しくて辛い事の連続でした。でも今は毎日が楽しい。現在も続けている演技トレーニングですら楽しい！私は何をしたいのか？どうなりたいのか？いつも自問自答します。これからどういいう変化を起こすかは自分次第。今より一歩でも向上していきたい！やる気がいっぱい！何をするにも盛り上がる私でいたい！

この十年間で有り難い事に少しずつ出演作も増え、昨年は出演映画が岐阜柳ヶ瀬の映画館でも上映。舞台挨拶もさせて頂きました。またテレビで流れたＣＭを『観たよ！』と岐阜の友人から連絡も頂きました。嬉しかったです。制作された作品は観て頂いてこそ完成されるもの。どうかこれからもご覧頂き応援してください。よろしくお願ひ致します。

一人で動けない人生から 世界を旅しながら仕事を する人生へ

昭和57年卒
棚橋 玲衣



五年前に出会った講座がきっかけとなり、私の人生は一八〇度変わりました。

中学校教師を

経て学習塾を立ち上げ、自由もあって幸せな毎日を送っていましたが、発達障害を持つ生徒が増えてきたので、何か突破口になるものを探していました。

そんな時、その講座が目にとまったのです。

生徒のために学び始めた講座でしたが、講座の中で何回も自分に向き合ううちに、それまで忘れてしまっていた、もしくは見ないようにしていた「自分」が浮かび上がってきました。

本当は何がやりたいのか
本当はどう思っているのか

本当はどう生きたいのか
本当は誰と一緒にいたいのか
本当の強みは何なのか

…

私は、自分が本当に願っている生き方をしています。

そして、そうさせていたのは「自分には価値がない」という思い込みだった、ということに気がついたのです。

その思い込みを手放したとき、本当の意味での自由を手に入れ、私の人生はど

んどん変わっていききました。

天職だと思って二三年もやってきた塾を、手放そうと決断するまでに二年かかりましたが、大人が変われば子どもたちにも希望の未来を届けられると確信して、塾を手放しライフプロデューサーに転身しました。

それから三年。

今は、自分らしく自由に生きるためのオンライン講座を構築し、世界中どこにいても仕事ができるライフスタイルを手に入れ、行きたいときに行きたいところへ自由に行けるようになりました。

石畳のある古い街並みを歩いたり、歴史的建造物や世界遺産を見て回ったり、友人に会いに行ったりなど、ずっとやりたかったことを実現しています。そして、この自由に生きる姿を見ることが、他の人への応援に繋がっていくことに幸せを感じています。

昨年は、アラブ首長国連邦、ドイツ、スイスを旅しながら、講義の配信をしました。

IT音痴で、一人で動くことも苦手だった私が、一人で飛行機に乗って移動し、一人で海外の街を歩き、海外からオンライン講座を配信することになるなんて、私が一番驚いています。

この先、人生の最期まで、「自分らしく自由に自分の人生を生きていきたい!」と思っています。

同級生と結婚して

昭和57年卒
久保田順子



「同級生との結婚」を主なテーマとしての寄稿の依頼をいただきましたので、恥ずかしながら少し書かせていただきます。

昭和五四年に岐阜高校に入学し、一年生で同じクラスになった夫と出会いました。長い交際期間を経て、二五歳になる年に結婚しました。三人の子どもの目、結婚して三七年目になります。

私はごく普通の人間ですが、夫の高校時代の友だちには素晴らしい経歴や才能を持った方々が多く、夫のおかげで自分では出会うことのなかった人たちと縁ができました。夫の友だちは家族ぐるみでのお付き合いをさせていただいたり、それぞれの立場でお互いのスキルや得意分野での力を出し合って形にしていくなをそばで見えてきました。そんな環境に身を置くことで、新しい刺激や学びを得る機会も増えました。

また、高校時代を共に過ごしたからこそ、「あの先生、厳しかったよね」「あの店、まだあるかな?」といった思い出話ができるのは、同級生夫婦ならではの

の楽しみです。どんなに年月が経っても、ふとしたきっかけで昔の自分たちに戻れる瞬間があるのは、特別なことだと感じています。

最近は、同級生と食事をしたり、買い物に行ったりすることが、私にとって大きな楽しみのひとつになっています。昔と変わらないノリで話をし、それぞれ大人になったからこそその話題も増えて、そんな時間がとても心地よいと感じています。

さらに、大人になる前からの関係だからこそ、価値観の根本に共通するものがあり、何気ない日常の中でも「それ、わかる!」と共感し合えることが多いのも心地よい点です。

私は一五年ほど前にアクセサリーのデザイン、制作を始め、現在は名古屋市内のデパートを中心に期間限定販売を行っています。

昨年、岐阜高島屋で期間限定販売を行った際、同級生が一〇人ほど遊びに来てくれました。私の活動を見てもらうことができ、本当に嬉しかったです。同級生のみならず応援してくれることに、心から感謝しています。

高校生の頃は想像もしなかった今の関係ですが、同じ時代を過ごしたからこそ築ける絆を大切に、これからも共に歩んでいきたいと思っています。

母と岐阜通信課程

昭和57年卒

森田 尚人



岐阜高校に関する私の最も古い記憶は、幼い頃、校舎の火災報知器を鳴らしたことだ。当時、私の母は岐阜高校の通信課程で学んでいた。面接指導の日に、私は自転車に乗せられて母と一緒に登校していた。廊下の壁にポツンと赤い輪っかに囲まれたボタンがあるのが不思議で、母にせがんで抱き上げてもらうといきなりボタンを押した。母はあわてて事務室に謝りに行ったが「よくあること」で済んだらしい。

一九六九年の通信課程の小冊子「岐阜通信」に母が卒業にあたっての思い出を寄稿している。それによると、母は徳島高等女学校の三年生の時に父親をなくし、家族を支えるために中退して家業の洋裁店を手伝った。その後、縁あって岐阜に嫁いだが、再び勉強したいという気持ちは強まるばかりだったそうだ。そして兄が一歳八ヶ月の時に思い切って岐阜高校の通信課程に入学した。その年の一〇月に私が生まれているので、入学式の時には私は母のおなかの中にいたらしい。

勉強する上で一番苦労したのは子育てとの両立だった。盲学校の教師をしていた父は全盲だったため、幼い兄弟を預けて外出することができず、なかなか面接

指導に行けなかった。どうしても必要な時は子供を連れて行ったということなので、冒頭の記憶はその時のものだろう。子供が少し大きくなると父と留守番ができるようになるのだが、面接指導のある日曜日に母がいけないのは寂しかったらしい。母が学校に行かないと聞くと「ヤッホーの日曜日だ」と喜んでいたらそうだった。

父もラジオの通信高校講座を録音するなどして母の勉強に協力した。卒業に当たって母はこの六年間、私を支えてくれたのは主人の理解と愛情でした」と感謝を綴っている。

母は私が五歳になるまで高校生だった訳だが、机に向かって勉強している姿を見た記憶はない。子供と一緒にいる時は母親の役割を優先してくれたのだと思う。後年、兄も私も岐阜高校でお世話になった。母が岐阜と結んだ縁が招いたのかもしれない。

母は卒業して間もなくリウマチを発症し、長く闘病生活を送る事になった。苦勞の多い人生だったが、卒業にあたって「広い意味での勉強をこれからも続けた」と書いた通り、絵や俳句を続けるなど終生、学ぶことが好きだった。

今回、母と岐阜について書いてみようと思い、母の名前の載った同窓会名簿を開いたところ、先ほどの岐阜通信がポロリと出てきた。母の遺品を整理した際に見つけて、はさんであつたらしい。「意味のある偶然」というのだろうか、母に背中を押されたような不思議な気分だった。



私の「やりたい」ができた学校

平成4年卒
川瀬 友亜



息子の三者懇談で担任の先生が同じ高校を卒業したとわかり、高校の思い出を聞いたことがある。

考えていた以上に勉強が大変で、本当に三年間つらかったとのことだった。高校に入学早々、初めての三者懇談で「下から数えたほうが早い成績で入学しているから、三年間つらいかもしれないけれど頑張つて。」と言われた私だが、そこまでつらいと思ったことはなく、充実した楽しい三年間を過ごした。テストの成績はいつも五〇番代と逆に振り切っていたから、点数の低さに対する感覚は麻痺していたのかもしれない。けれど、本当に輝くような三年間だったのはどうしてだろう。

部活動は無線部だった。日々の活動はほぼほぼで、年に四回ほどあるコンテストには積極的に参加した。思い出深いのは、夏のコンテスト。移動運用することが条件だったため合宿を企画したのだが、顧問の先生の都合がつかなかった。顧問でなくても誰か先生に同行してもらえるのであれば合宿を行っても良いという学校の許可が得られ、でも夏は運動系の部活動の大会が目白押し、二泊三日の文系部活動の合宿に付き合ってくれる先生がいるのか、かなり不安だった。ところが「おもしろそうだから、参加してもいい」と

と言ってくださる先生が見つかり、無事合宿は決行。合宿に付き合ってくれた先生は、翌年晴れて（？）我が部の顧問になっていただいた。

「やりたい、やってみよう」という思いに応えるのは、簡単なように見えて実は難しい。大人になればなるほど、しがらみや制約、責任の所在などいろいろと考えてしまい、子どもに対して無難な提案しかできなくなってしまうがちだ。今だからこそ、私たちの無茶な合宿計画に割と簡単な条件で許可を出してくれた学校の寛大さや、超過勤務や休日出勤になつてしまった先生の心遣いがよくわかる。部活動でも生徒会活動でも校外での活動でも、いろいろ「やりたがり」だった私にとって、岐阜高校はやりたい思いを全面的に支えてくれる場所だった。好きなことを結構自由にやらせてもらえ、出来たことはきちんと評価してもらえ、そういう高校で三年間過ごせたことはその後の私の大きな支えになっている。

勉強という物差しだけで評価され、それがすべてだったなら、多分私もつらい三年間だったに違いないだろう。赤点ばかりで先生方には相当ご迷惑をおかけしたけれど、かけがえのない経験をさせてもらったことには感謝しかない。これからも私のような勉強以外にやりがいを見出した生徒にとっても、ここで過ごせて良かったと言えるやりたいことが思い切りできる学校であってほしいと思う。

長良川に触れよう

平成4年卒
源 利文



同窓会の案内を受けて高校時代を振り返ると、ひたすらバレーに明け暮れた日常、思い出すと気恥ずかしい恋愛、もちろん少しは勉強のことなども思い出され、同時に高校卒業後には離れてしまった岐阜のあれこれが頭の中に蘇ってきました。そんな中でも私の中では、岐阜といえばイコール長良川、とつながることに気づきます。

考えてみると、これまでの人生（まだ半生？）は長良川と切っても切れない縁があったようです。実家の目の前は長良川。小学校は藍川小、中学校は藍川北中で、藍川とは長良川のことであるということは校長先生のいつもの長い訓示の中で必ず触れられていました。夏休みには学校のプールよりも近い長良川でよく遊んだものです。高校時代は「百里」のごく一部ではありますが、川沿いの一〇kmの道のりを自転車を通い、夏の部活帰りに鵜飼の屋形船を眺めて一息つきました。物理を専攻したいと思って入学した大学では、いつのまにか生物を専攻して、長良川を代表する魚であるアユの研究をしました。最近では揚子江やメコン川という教科

書に載るような川を訪れる機会もありますが、やはり長良川には特別な魅力があります。岐阜高校の後輩たちと共同研究をする機会にも恵まれ、もちろん長良川を対象とした研究を行いました。あらためて素晴らしい川からいろいろな恵みを得てきたなあと感じ入るものがあります。

最近の子供達は川で遊ぶなんてとんでもないと言われるようです。確かに夏休みに実家に帰っても、地元の子供達が泳いでいる姿はほとんど見る事ができません。私たちが子供の頃より水質は向上して、より綺麗な川になっているのに、川と触れ合う人は以前より減っています。私が「千仞の嶽」や「百里の水」のある自然を尊いと感じるのは決して年齢のせいだけではないでしょう。ちょっと硬い話をするなら、人と環境の間にはお互いに影響し合う関係があり、岐阜の人の成長には岐阜の環境が大きく影響するはずですが、また、子どもの頃の自然体験が自然環境に対する態度を決めるという報告もあります。若いうちの自然体験が大事なのであれば、まずは岐阜高校から、目の前の長良川に触れる授業をやってみてはどうでしょうか。それが長い目で見たときに岐阜の素晴らしい自然を守ることにつながるかもしれません。

全ては自転車通学から始まった

平成4年卒
加藤 裕章

私の高校時代を振り返ると、自宅の山県市から学校まで、毎日二〇キロ弱を自転車で通った日々が思い出されます。鳥羽川、長良川、金華山、そして路面電車が走る岐阜市内の風景は、今でも鮮やかに脳裏に浮かびます。ただ、早起きが苦手だった私は、岐阜北、県岐商などに通う自転車の高校生たちを追い抜きながら、いつも時間ギリギリで学校に滑り込んでいました。

大学に入学した最初の夏、「夏休みに北海道でキャンプする」というサークルの勧誘に惹かれ、野外活動クラブ（通称やかつ）に入会しました。実際に北海道を訪れると、大雪山に登り、礼文島や道内各地でキャンプをするという、予想以上に本格的な活動が待っていました。この経験がきっかけとなり、私は自然と向き合う生活にのめり込んでいきました。大学時代は、日本全国の山々を登り、川を下り、子どもキャンプの手伝いをするなど、自然の中で遊び尽くしました。その中で、山や川の地形がどのようにに成り立っているのか、地球の不思議に興味を持ち、大学三年から地球科学を専攻することに。卒業論文では、富士山の斜面地形の成因を調査し、地形形成の奥深さを学びました。

大学卒業後は、生まれ育った岐阜県で地域に貢献したいという思いから、岐阜県職

員として約一〇年間、主に防災業務に従事しました。その間も山遊びは続き、雪山や沢登り、海外登山など、より探検的な活動にのめり込んでいきました。そして縁があつてアウトドア会社に転職し、岐阜県内のエコーリズムの推進に携わるようになりました。

現在は、地方議員としての活動を経て、自然や歴史資源を活用した地域づくりやエコーリズムの推進、環境教育などの事業に携わっています。また、もう一つの役割として、神社の神主も務めています。私が奉仕する十五社神社は、二〇二六年に創建一二〇年を迎えることから、現在、その記念祭の準備を進めています。さらに、二人の息子の子育てをしながら、趣味の登山も続けています。

振り返ると、その時々やりたいことをやってきた計画性のない人生かもしれません。自分では「行き当たりバッチリ」だと前向きに考えています。自然と関わる人生を歩む中で、高校時代に毎日自転車通学で培った体力と風景の記憶が、今も自然と向き合う力となっています。そして改めて感じるのは、岐阜という地は三〇〇〇m級の山々や清流に恵まれた、誇るべき自然の宝庫だということです。残りの人生も、自然を活かしながら、仕事にも遊びにも創意工夫を凝らし、子どもたちが誇れる未来づくりに貢献していきたいと考えています。後輩の皆さんも、自分の興味を追求し、新しい挑戦を恐れずに進んでください。

知命ーマリンバとともに

平成4年卒
井上 有子

いたずらな小鳥が私の頭上に落としたのは、桜の花。ロサンゼルス春、ぽつんぽつんと花

開く桜の前で小さな春を愛でていた時の出来事でした。在米二十余年、些末な事でも涙し、郷愁を覚える年頃…

岐阜との関わりは、幼少に遡ります。父が水泳部出身で、夏の合宿で今はなきプールでぶかぶかしたり、雪のちらつく長良川へ初泳ぎを見に行ったり。幼心には切磋琢磨する仲間が楽しく集う高校だと映りました。しかし、入学するや否や、あの憧れはどこへやら？と自分の成績を見て現実と直面する日々でしたが、放課後にはブラスバンド部でひと時の平和を感じられたのは、文武両道の仲間のおかげでした。

幼少より親しんでいるマリンバ。大学では世界的マリンバ奏者である安倍圭子先生に師事しました。演奏と指導が夢でしたので、教育実習では岐阜高でお世話になりました。高校三年次担任の竹中良典先生も教鞭を執っておられ、指導は勿論、留学への応援も頂き、熱心な生徒達との間で、再び岐阜に育てられました。

マリンバはクラシックのソコ楽器としての認知はごく最近で、専門に学べる音大も世界的に少なかった為、大学時代は

世界中から留学生やプロが集まり、異文化交流の機会もあり、刺激的な毎日でした。

卒業後は本場のクラシック音楽に肌で触れたく、ハンガリー留学をし、学生ながらプロとして邦人作品を演奏し、沢山の拍手を頂き、国際的な活動にも自信が持てました。帰国後も地元名フィルともソリストとして邦人作品を共演できた事で、マリンバへの情熱を新たにしました。

米国移住後も、年々グローバルリズムが進む中で、日本のマリンバ、そして大和心も一層大切にしています。マリンバの可能性を広げる為に、作曲家へ新曲委嘱や、自らも岐阜の紅葉が川面を流れる鮮やかさや幽玄さを元に作曲し、ローザンヌで演奏をしました。一方でコロナ禍では、自らにも累が及びつつも、疲弊する日本の経済、文化を危惧されたデヴィ夫人より音楽財団での演奏のご指名を受け、日本へひとつ飛び。成田から岐阜へのドライブや隔離を強いられど、伴奏者と十分間のみのリハーサルであるうと、多くの著名な方々を目前に大緊張でしたが、百折不撓の精神で臨みました。

時折する日本での演奏では、同窓生の皆様の叱咤激励のみならず、スポンサーになって下さったり、イベント、アウトリーチ活動にお声がけ下さったり。いつまでも変わらぬ友情に感謝の止まない私です。

基本的人権の擁護者として

平成4年卒
武藤玲央奈



私は、平成一三年に愛する地元岐阜県で弁護士登録しました。以来二四年ほど、ずっと岐

阜市内で弁護士業務をしています。

私は、岐阜市郊外の田舎の長男坊ということもあり、当初から地元岐阜県で弁護士をしようと思って司法試験を受験し、合格しました。弁護士になる前の実務修習も、岐阜を第一希望とし、希望通り岐阜で受けました。

岐阜県の弁護士数は、私が登録した時は八八名でしたが、現在は二二〇名前後で推移しています。ここまで同業者数が短期間に増えた業界も珍しいと思います。ご存じの通り、二一世紀に入って司法制度改革の名の下に司法試験合格者の増員が図られ、これに伴って弁護士の数も激増しました。弁護士の活動範囲も多様化しており、今の人数で一概に足りているとは言いにくい状況ですが、以前ほどは業務に追われる雰囲気でもない印象です。

弁護士法一条一項には、「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする。」と謳われています。地方では長く弁護士が少なかったこともあり、地域の有力者、力の強

い人の声が大きかったりすることもあります。我々地方の弁護士は、そんな地方にも法の支配を行き渡らせ、市民の皆様の基本的人権の擁護者となるべく、日々地道に業務に励んでいます。

私は、昨年度岐阜県弁護士会の会長をさせていただきました。「困った時に真っ先に思い出してもらえる弁護士、弁護士会になる」とを公約に、市民の皆様へのアクセスを少しでも容易にできるよう知恵を絞りました。この冊子にも、岐阜高校卒業の岐阜県弁護士会会員の名刺広告が掲載されています。卒業年も記載されていますので、ご自身の近い年代の弁護士に困りごとを相談されてはいかがでしょうか。

私自身も、これまで岐阜高校卒業という縁でお仕事をいただくこともよくありました。弁護士に限りませんが、地元で商売する者にとって、岐阜高校卒業は正に金看板です。同じ校歌を歌っていた同窓生の皆さんとご縁をこれからも大切に、市民の皆様の基本的人権を擁護する活動を長く続けていきたいです。

フレイルと・サルコペニアに不撓不屈の精神で挑む…筋力トレーニングの重要性

平成4年卒
和座 雅浩



岐阜高校卒業生の皆様、こんにちは。リハビリテーション病院に勤務する医師として、フレイル(虚弱)やサルコペニア(筋肉量減少症)対策の重要性を痛感しております。これらの状態は、高齢者の生活の質を低下させ、転倒や骨折のリスクを高めます。最近では認知症や生命寿命にも関わっていることが明らかになってきました。

特にサルコペニアは、加齢に伴う筋肉量と筋力の減少を特徴とし、日常生活の活動能力や自立度を低下させます。しかし、筋力トレーニングを行うことでこれらの問題を予防し、改善することが可能です。筋力トレーニングは筋肉量の維持・増加だけでなく、骨密度の改善、代謝の向上、さらには精神的な健康にも寄与することも注目されています。

体力に自信がない方や高齢の方には、無理のない範囲での筋力トレーニングが推奨されます。例えば、軽いウェイトを使った運動や、壁につかまっのスクワット、膝をついての腕立て伏せなどが効果的です。無理はせず、軽負荷のメニューから始め、徐々に負荷を上げていき、継続することが大きな効果をもたらします。

(過負荷、漸進性の原理)。また、タンパク質の摂取や十分な睡眠も重要です。

私は五〇歳を過ぎてから、映画ロッキーにインスパイアされて筋力トレーニングに励んでいます。ロッキーは、当時の同級生達と何度も見た(見させた?)笑映画でしたが、彼が本映画シリーズの中で一貫して示した「打たれても、打たれても、立ち上がれ!」の不屈の精神は、我が母校の校訓「百折不撓・自強不息」であると気付いたからです。全身の筋肉をバランス良く鍛えた結果(全身性の原理)、最近では腹筋トレーニングの王道であるドラゴン・フラッグもできるようになりました。座ることも嫌なほど筋肉痛に幾度も悶絶しましたが、ロッキー精神を思い出して頑張りました。

筋力トレーニングの効果は高齢者にも十分に得られることが多くの臨床研究で証明されています。私が担当した患者様の中には、三ヶ月間のリハビリで八・七kgもの筋肉量増加を達成された方もいらっしゃいます。

年齢を重ねても健康でアクティブな生活を送るために、今からでも遅くありません。フレイルやサルコペニア対策に最も効果的な方法は筋力トレーニングを習慣化することです。皆様が健康で充実した日々を送られることを心から願っております。

高校時代の経験からつながる今

平成14年卒
角 雄記

後先考えずに
何にでも手を挙
げてしまう高校
生でした。「ス
ラムダンク」の
影響を受け、B

S放送のNBA観戦に夢中だった当時。スポーツ記者になりたいと漠然と思っていましたが、岐阜県と交流のあった米ユタ州への留学生の募集を知るや否や、単に「バスケの本場に行きたい」という理由から、学校に推薦を頼み込みました。

応援団(正確には委員会)への立候補もそう。岐阜に入学した一九九八年は、サッカー日本代表が初めてW杯に出場し、プロ野球の中日ドラゴンズは九九年のリーグ優勝を前にチーム力を蓄えていたところ。運動が決して得意でなかった自分が応援団に入ったのは、いろんなスポーツ観戦を楽しむ延長だったように思います。

米国留学については、何とか選抜の狭き門をくぐり抜け、県から奨学金をいただいて約一年、現地の公立高校に通う得難い経験をしました。応援団では三年時、高校野球県大会で、同級生らの活躍もあって岐阜はベスト四に進出。腰を痛めて体はポロポロでしたが、懸命に声を枯らしました。

半面、自分が何者になるのかわからない思春期特有の漠然とした不安感や、自

由すぎた留学生生活の反動もあったと思いますが、内面には、ずっと苦しさを抱えて高校生活を送っていました。背伸びをして大江健三郎や村上龍らの小説を読みあさり、大人への反抗という形でその苦しさを表現していたように記憶しています。学校をさぼって映画を観て午後から登校した上、悪態をつくなど、先生方にも迷惑を掛けました。

読書好きが高じて「物を書く仕事があった」と新聞記者になりました。多くの社会問題に触れるにつれて「困った人の権利を擁護できる記者になろう」との思いを強くし、冤罪事件の報道などに取り組みました。最近、死刑囚が再審無罪となった著名事件の影響もあって冤罪事件全般への注目が高まっています。そうした流れの中で自身が手がけた報道に再び注目いただき、映画やテレビ番組になる企画も進んでいます。

高校時代には見通すことなどできなかった今ですが、この原稿を書きながら、後先考えずに手を挙げてきたことも、苦しかった時期も、一つ一つの経験が今の自分を形作ってきたと実感します(後悔も多いですが)。メディアの変革の時代にあつて、新聞業界は困難に直面していますが、これまで通り自分の気持ちに素直に従って自然体でこつこつと仕事をしていくだけかな、と思います。

感謝の気持ち

平成14年卒
大西 那奈

現在アメリカ中西部にある大学で日本語を教
えております
が、もともとは
英語教師を目指
していました。

TESOLを学びに留学した時、日本語を勉強する大学生の学習支援をしたことがあります。その時、動詞の活用の学び方が自分の知っているものと全く違ってあり、「え、何これ?」とかなり驚いたことを今でも覚えています。この学習支援を通して、日本語教育法を学びたいと思ったことが今のキャリアの始まりです。

日本語教師になるまでに二度大きな絶望感を味わったことがあります。一度目は日本語教育の修士課程を始めたばかりの頃。ある必須授業の内容がどうしても深く理解できず、学んでいることがどう使えるのかも見通せませんでした。この単位が取れなかったら卒業できない、留学一学期目にしてもう帰国しなければならぬのか。この時の不安を同期の友人には打ち明けていました。ある日その授業が終わった後、その友人とプログラムの先輩二人がよかったら話そうと誘ってくれました。授業が終わったのが夜でしたから、その日は一〇時ぐらいいまで教室にいました。涙を流しながらもかなり勇気づけられ、なんとか授業の単位は取れるのではないかといい気持ちにさせてもらえました。その日以降、図書館でその友人と一緒に勉強するようになり、課題論文について質問があればできる環境を与

えてもらいました。

二度目の絶望感を味わったのは就労ビザの期間が残り半分となった時のことです。永住権取得の当てがありました、それがなくなってしまう途方に暮れていました。この時改めて自分はどこで働きたいのかを問うことになりました。多角的な視点から考えた末に出した答えがアメリカでした。しかし、永住権を支援してくれる大学はそんなに多くありません。スポンサーになってくれる大学に就職できれば帰国。その年の募集は永住権支援のある大学は三校でしたが、そのうち二校はもう選考が始まっていた。まだ間に合うことを確認し、急いで応募書類を準備したのですが、その際もまた多くの助けを得ました。大学院時代からの友人、友人家族、友人の友人。皆私の応募書類の推敲を手伝ってくれました。英語が母語でない私にとっては本当にありがたいことでした。

私はあまり自分の気持ちを打ち明けることが得意ではありませんが、このような経験を通して自分の内面をもっと見せられるようになり、自分には支えてくれる人がしっかりいるのだというも感じていきます。その安心感は海外で生活を送る自分の心の支えです。

自分はこうしたいのだということが心に決まると自身の行動がそれに向かうので実現していくんですね。そして私の場合、いつも周りの人からの支えと協力がその過程にあります。だからこそ感謝の気持ちは持ち続けていたいと思っています。

挑戦を忘れない

平成14年卒
岸大

■はじめに

今回、寄稿を依頼された時に、優秀な同期・先輩・後輩がいる中で、高校生当時、文武両道を貫くことができなかった私が担当してよいのか、大変迷いました。

ただ、こんな機会をいただくことは滅多にないので、「挑戦」することにしました。この機会を与えてくれた同級生に感謝いたします。

■挑戦を忘れない姿勢

振り返ってみると、私のたかだか四一年の人生ですが、「挑戦」が付き物だったように思います。

僥倖ながら、特に心に残っている出来事をピックアップさせていただきます。

一九九九年…先生方の反対を受けながらも岐阜高校を受験入学後は優秀な同級生ばかりで、勉強は苦勞しました

※野球部に在籍し、仲間と切磋琢磨したおかげで、二〇〇二年夏の大会では当時一八年ぶりのベスト四進出。

(在校生、OB、保護者の皆様から本当に大きな大きな声援をいただきました。長良川球場や各務原市民球場で響き渡った皆様の声援は、一生忘れません)

二〇〇二年…筑波大学体育専門学群を受験※浪人を許してくれた両親に感謝

二〇〇三年…硬式野球部に入部し、大学レベルの野球を経験

(最終学年の二〇〇六年に、当時一〇年ぶりの首都大学リーグ優勝を果たし、関東大会

を勝ち抜いて明治神宮大会に進出

二〇〇七年…大学同期と社会人硬式野球クラブチームを立ち上げ

二〇一四年…事業会社から、畑違いのコンサル業界へ転職

二〇一六年…右肩関節唇部分断裂からの復帰二〇二五年…社会人硬式野球クラブチームの選手兼監督に就任

これらはすべて「お前には無理だよ」「どうせ失敗する」と言われながら選択したもののばかりでした。

声をかけてくれた人たちは、純粹に私を心配してくれていたのかもしれない。

ただ、今となつては「挑戦できない自分から離れてほしくない」という気持ちから発せられた言葉が多かったように感じます。

私は他人の挑戦を否定する人たちのために生きていくわけではありません。挑戦したことで得られるかもしれないものを誰かが代わりに手に入れてきてくれるわけでもありません。

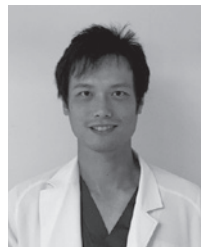
もちろん、挑戦すべきか否かを熟考することは必要ですが、自分の人生は自分で責任を持って「決断」して進めていくことが大切だと思っています。

「誰かに決められたこと」を選択して失敗したり、挑戦しなかったことを後悔するのは自分自身であり、それに対して誰も責任を取ってくれません。

だからこそ自身で考え、悩み、決断すること大切にしたいと思っています。

……と、偉そうに言いながらも、まずは私自身が実践できているかを振り返り、クラブチームのメンバーに見せて、伝え続けている日々です。

生涯、百折不撓

平成14年卒
丸田 明範

医師を志した高校二年生の夏から消化器内科医として勤務する現在までの二四年間、自分にとってはいくつもの苦悩と達成感に満ちたあつという間の年月でした。

六年間の岐阜大学医学部課程を卒業後、中部国際医療センター(旧…木沢記念病院)で臨床研修をスタートしました。数ヶ月毎に各診療科をローテーションするシステムで、毎日が新しいことの連続でした。早く一人前の医師になりたいと、本来は月に四〜六回の当直を一〇回程度まで増やして、とにかく多くの患者さんを診察して救急診療のノウハウを身につけていったことを覚えていきます。

二年間の研修が終了し、消化器内科を専攻。主治医として患者さんを診る責任感が大きく押し掛かってきました。消化器内科専攻といってもほぼ新人と同じですから、看護師さんや上司にアドバイスをもらいながら、多くの重症患者さんの診療に従事しました。消化器内科では当直の他に待機当番があり、緊急性の高い消化器疾患の二四時間対応をしています。内視鏡治療の良し悪しで患者さんの予後は変わってしまう

ため、深夜の呼出であっても常にベストな緊急内視鏡治療が求められます。消化器内科を始めた頃は日常診療の忙しさと、緊急内視鏡治療のプレッシャーが非常に大きなものでしたが、尊敬できる多くの上司や、頼りになる同期に恵まれて何とか乗り切っていくことができました。

現在は消化器内科の中でも胆膵領域を専門とし、診療・内視鏡治療ともに個人のスキルを磨くだけでなく後輩の指導をする立場となりました。以前は手術が必須であった疾患でも、より低侵襲な内視鏡治療で完遂できる分野も増えており、そこに胆膵内視鏡医としての楽しさややりがいを感じています。また最近では仕事の息抜きの一つとして岐高同級生メンバーで定期的に飲み会をしています。気兼ねのない仲間と集まれる時間はとても楽しく、自分と異なった職に就いている同級生の話はとても興味深いです。

医師という職業には常に何かしらのチャレンジがあります。診療(自身のスキル)・研究・教育など分野は多岐にわたりますが、最初は困難であっても諦めず研鑽を重ねていくことで目標を一つ達成し、また新しいチャレンジが生まれます。今後もこれまでと同じように百折不撓の精神で医師を続けていきたいと思っています。

高 岐 高 校 よ り

第155号

令和6年5月10日
岐阜県立岐阜高等学校
PTA会長 宮崎征一郎
印刷/ヨツハシ(株)
題字/筑間 敏博

CONTENTS

●創立百五十一年目 新たなスタート	学 校 長………… p1
●桜雲をながめて	PTA会長………… p2
●第十三回科学の甲子園全国大会	進路指導部………… p2
●歴史と伝統そして新たな創造	生徒指導部………… p3
●新たな歴史を刻もう！	進路指導部………… p4
●令和6年度 進路指導計画	進路指導部………… p4
●令和6年度 主な大学入試結果	進路指導部………… p5
●令和6年度大学入試 合格者たちの声	…………… p5~p6
●海外研修A(アメリカ)報告	進路指導部………… p6
●海外研修B(マレーシア・ボルネオ)報告	進路指導部………… p6
●各年次団紹介	年 次 主 任………… p7
●6・7月行事予定	教 務 部………… p8
●令和6年度 教職員人事異動	…………… p8



▲対面式



▲入学式



▲部紹介

創立百五十一年目 新たなスタート



学 校 長
石田 達也

今年の春は三月後半に寒い日が続いたこともあって、桜の開花が例年よりも遅く、新年度のスタートを桜の花が彩ってくれました。久しぶりに登校する生徒たちの表情にも、心機一転、今年度もがんばろうという気持ちが表れています。生徒たちは順調に新年度のスタートを切っているようです。

四月九日には、柔らかな春の日差しの中、令和6年度岐阜高校入学式を挙行し、三百六十名の新入生を迎えることができました。

新入生の保護者並びにご家族の皆様、改めて、ご入学、誠にありがとうございます。これにより、今年度は全校生徒一〇八〇名で新たなスタートを切ることとなりました。

入学式では、新入生に対して、各自の夢や希望を叶えるため、高校生活において期待することを二つ話しました。

一つ目は「幅広く新たな活動に積極的に挑戦すること」です。高校生活では、学業とともに部活動も高校生活の大きな柱となります。また、各分野の専門家による講演会に参加したり、大学主催の発表会や全国規模のコンテストに挑戦する生徒も多くいます。挑戦は視野を広げ、人間性を高め、必ず大きな飛躍をもたらします。決して臆することなく、友人と切磋琢磨しながら、様々な活動に積極的に挑戦することを期待します。

二つ目は「二つの『じりつ』の力を獲得す

る」ことです。その一つは自らを律する「自律」です。自らを律するとは、自分の意志で自分の行動を正しくマネジメントすることです。時間の使い方、優先順位、弱点強化など、行動をマネジメントして能力を高めてほしいと思います。

もう一つは、自らの足で立つ「自立」です。入学後は自分の将来を自分の意志で選択し、実現に向けて努力していくことが重要です。周囲に惑わされず、自分の意志を強く持ち、目標に向かって前進してください。新入生には「自律」と「自立」の力を獲得することを期待します。

また、同じ日に行われた前期始業式では、「心の豊かさ」とは何かと生徒に問いかけながら、他者と比べるのではなく、自分を正しく評価し、向上心に素直に向き合って、豊かな自分を目指してほしいと伝え、モチベーションを高めて「自分らしく」努力していかうと激励を送りました。

新年度の始まりは環境が変化することが多く、誰もが少なからず緊張や不安を感じる時期です。一方で、心機一転、新たなスタートを切る良い機会でもあります。学校が「創立百五十一年目」の新たなスタートを切るにあたり、自らの手で岐阜高校の新たな歴史を築いていこうと生徒たちに呼びかけました。

生徒の皆さんには、本校の長い歴史を継承し、校訓「百折不撓 自强不息」を貫き、高みを目指して挑戦を続けていくことを大いに期待しています。私たち教職員も、皆さんの心に火をつけるため、精一杯、支援していきます。

保護者の皆様には、今後とも本校の教育活動にご協力いただきますとともに、生徒たちの成長と夢の実現に向けて、温かいご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

各年次団紹介

* 1 年次団 *

◎ 年次主任 ○ 副年次主任



【後列右から】 年次所属 筑間 敏博 (芸術)	年次所属 高瀬 智子 (国語)	1組副担任 武藤 恒平 (英語)	2組副担任 ○八代 周士 (数学)	3組副担任 安田 翔 (地歴・公民)	4組副担任 阿部希容衣 (芸術)	5組副担任 鈴木 裕貴 (保健体育)	6組副担任 前田 博子 (英語)	7組副担任 古川 真哉 (国語)	8組副担任 福野衣里子 (国語)	9組副担任 太田 晶子 (理科)	年次所属 谷口 輝己 (芸術)
【前列右から】 1組担任 加藤 健司 (地歴・公民)	2組担任 山崎 友梨 (数学)	3組担任 古橋康次郎 (数学)	4組担任 田口宗右都 (地歴・公民)	5組担任 石博 啓乃 (数学)	年次主任 ◎ 瀬川雄一郎 (理科)	6組担任 岩井 恭平 (保健体育)	7組担任 五島 興 (英語)	8組担任 伊藤 誠人 (理科)	9組担任 森本 碩 (英語)		

* 2 年次団 *

◎ 年次主任 ○ 副年次主任

【後列右から】	年次所属	永瀬 晶子 (理科)	年次所属	柘植 研一 (理科)	1組副担任	今井 順也 (保健体育)	2組副担任	青谷 勇佑 (数学)	3組副担任	田中 諭志 (数学)	4組副担任	伊藤 拓磨 (情報)	5組副担任	稲葉由里子 (国語)	6組副担任	日比野良平 (理科)	7組副担任	水谷 圭佑 (地歴・公民)	8組副担任	遠藤久美子 (理科)	9組副担任	北川真珠子 (国語)	年次所属	伊藤 正剛 (英語)
【前列右から】	1組担任	森 有史 (理科)	2組担任	大野 玲子 (英語)	3組担任	柘植 望 (保健体育)	4組担任	○若山 智也 (国語)	5組担任	武藤 雅紀 (数学)	年次主任	◎森 智子 (英語)	6組担任	高橋 慎治 (地歴・公民)	7組担任	岸本 真里 (英語)	8組担任	大谷 太一 (地歴・公民)	9組担任	若岡 亮仁 (数学)				



* 3 年次団 *

◎ 年次主任 ○ 副年次主任



【後列右から】 1組副担任 伊藤 誠司 (理科)	2組副担任 市原 英正 (保健体育)	3組副担任 藤吉真理子 (国語)	4組副担任 川村 謙二 (地歴・公民)	5組副担任 白木 聖美 (英語)	6組副担任 小澤奈津子 (保健体育)	7組副担任 堀口 和人 (英語)	8組副担任 北川 幸久 (数学)	9組副担任 小林 里恵 (家庭)	年次所属 棚橋 誉久 (理科)
【前列右から】 塩澤 一樹 (数学)	2組担任 木野村淳子 (英語)	3組担任 小池 春陽 (英語)	4組担任 井深 克憲 (数学)	5組担任 澤田 宏 (国語)	年次主任 ◎ 覺田 敬 (理科)	6組担任 及川 太郎 (理科)	7組担任 各務なつみ (国語)	8組担任 ○伊藤 翼 (地歴・公民)	9組担任 早水 寛幸 (数学)

高 岐 高 校 よ り

第156号

令和6年7月11日
岐阜県立岐阜高等学校
PTA会長 宮崎征一郎
印刷/ヨツハシ(株)
題字/筑間 敏博



▲写真部集合写真

CONTENTS

● 充実した夏休みに	進路指導部 …… p1
● 第一回学校運営協議会報告	教 頭 …… p2
● 充実した夏休みを過ごすために	生徒指導部 …… p3
● 教育相談室より	生徒指導部 …… p3
● 令和6年度PTA総会を終えて	PTA副会長 …… p4
● 東海地区高等学校PTA連合会	
三重大会に参加して	PTA会長 …… p4
● 岐阜高校で学ぶということ	3年次委員長 …… p4
● VUCAの時代	1年次委員長 …… p5
● I DO ME	1年次副委員長 …… p5
● 『縁』の価値は	2年次委員長 …… p5
● 母親として今できること	3年次副委員長 …… p5
● 遠足	1～3年次 …… p6
● 前期生徒会発足	生徒会長 …… p7
● 球技大会を終えて	体育委員長 …… p7
● 林間学舎活動について	1年次会 …… p7
● 全国高等学校総合文化祭岐阜大会に出場	写真部 …… p7
● 部活動だより	特別活動部 …… p8

充実した夏休みに

進路指導部

1年次生のみなさんへ

年度が変わり新たな気持ちでスタートしてから早くも3か月が経ち、夏休みを迎えようとしています。この3か月、みなさんは様々な活動に積極的に取り組んできたことと思います。学習面ではいかがでしたか？本当は、少し理解できていないところがあつて、しっかり復習したいけど十分に組み組めなかつた、発展的な学習に取り組みたいと思つても、部活動や翌日の予習や小テストの勉強のためにできなかったなど、自分の思い通りにはならなかつたというところがだれにでもあるのではないのでしょうか。夏休みは、思い通りにいかなかった部分を取り戻すチャンスです。この3か月間の振り返りをもとに、理解が不足している内容の復習を行ったり、興味のある発展的な内容に果敢に取り組んだりしてみよう。

今年の夏休みも、様々なイベントがあります。中でも、全国高校総合文化祭は最大のイベントです。文化系の部活動の人を中心に、大会に参加したり、運営の補助をしたりと多くの人が大会に関係します。全国から集まってくる高校生と交流を深め、多様な価値観や文化、自分にはない考え方を吸収しましょう。また、みなさんからはぜひ、岐阜県の魅力語ってください。

そのためには、まずは自分自身が岐阜県の魅力に気付かなくてはなりません。その中で、自分の視野を広げるきっかけにもなるでしょう。岐阜県魅力を語ることで、全国から参加する多くの高校生にきつと喜ばれるでしょう。

岐阜高校へ入学して初めての夏休みを迎えますが、この3か月で中学生から岐高生に成長できたでしょうか。4月当初は、隣に座っている仲間がどんな人か分からず、だれもがものすごく賢い人ばかりに見えたかもしれません。テストの成績に一喜一憂することもあつたでしょう。しかし、学習について今の時点で他人と比較することに価値はありません。大切なことは、自分の理解度を上げることです。夏休みは、各教科から多くの課題が出されます。その課題にどのように取り組むかが非常に重要です。課題に取り組みながら、自分の理解が不足している部分を認識し、それを克服できるように努めましょう。さらに、余裕がある人は、もっと深く掘り下げた発展的な学習にも取り組んでみましょう。自分のできる精一杯のことを実践して大きく飛躍する夏休みにしてください。

一方、学習面以外にも、いろいろな活動ができるのが、この夏休みです。4月の分掌オリエンテーションで、「みなさんが思い浮かべる職業の多くは、保護者の職業や社会生活で目に触れやすい職業です。しかし、社会にはいろいろな職業があります。中学生まで考えていたキャリアをいったんリセットして視野を広げてもう一度考え直してみよう。」と話しました。この夏休みはそんな視野を広げるチャンスです。ジョイントセミナー at 東大には多くの生徒が参加をしますね。東京大学で講義を聴くことができますし、国土交通省にて国家公務員としての仕事や、日本や世界の抱える課題などについて講演していただきます。また、その他の大学でもオープンキャンパスが計画されています。大学によっては、



球技大会を終えて

令和六年度前期生徒会の活動開始から3か月が経過しました。今期初めの活動は球技大会のルール変更の提案でした。活動開始後間もなくのことでしたが、迅速なアンケート調査や密度の高い会議、そして先生方のご協力によって実現することができました。皆様に感謝申し上げます。

その他にも、学校見学会や岐高祭に向けて準備が着々と進んでおります。今年度の岐高祭は体育委員や文化委員、部活動の力も借り、より楽しく、よりハイクオリティな岐高祭を目指していきます。技巧を凝らしてポテンシャルを存分に発揮してもらえよう、努力し

前期生徒会発足

前期生徒会長 田中 怜



前期生徒会執行部 集合写真

書記 (2-3) 深尾 弥玲
副会長 (2-7) 長谷川 聡一
会計 (2-9) 川上 紗代
会長 (3-3) 田中 怜
会計 (2-9) 宮脇 昌和
書記 (2-1) 瀧 那月

していきます。

今後皆さんの輝かしいアオハルの1ページを飾ることができるよう執行部一同努力していきます。今年度も生徒会活動へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

前期体育委員長 多賀 優翔

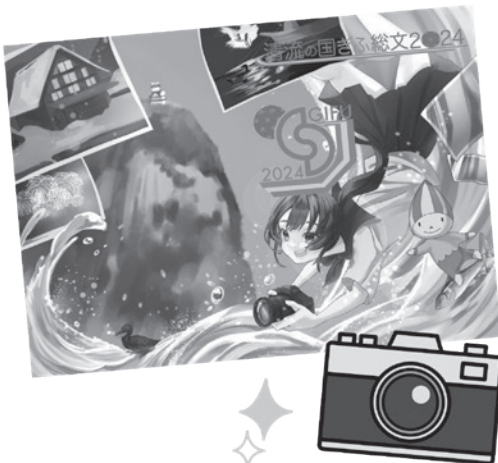
今年の球技大会は、おおむね天候にも恵まれ、教室棟まで声が響くほどの盛り上がりを見せる3日間となりました。初の球技大会に心躍らす1年次生から最後の球技大会に寂しさを感じる3年次生までそれぞれの思いがありました。が、みんな勉強に縛られた生活から解放され、より一層クラスの絆も深まったように感じました。

また、勝ち進んだチーム同士の戦いは非常にレベルが高く、見ても面白い試合ばかりでした。最後に、この大会に携わっていただいた全ての皆様、本当にありがとうございました。

林間学舎活動について 1年次会

7月20日より本校伝統行事である林間学舎活動が、奥飛騨温泉郷の「友學館」で2泊3日の日程で行われます。飯盒炊爨、上高地散策(または高山市街班別研修)、キャンドルサービスなどを実施する予定です。また、これに先立ち、6月29日にはPTAの有志の方々に学舎奉仕活動をしていただき、準備が整いました。ありがとうございました。

団	第1団	第2団	第3団	第4団	第5団
期 間	7/20(土)~22(月)	7/22(月)~24(水)	7/24(水)~26(金)	7/26(金)~28(日)	7/28(日)~30(火)
クラス	2, 5組	7, 9組	3, 6組	4, 8組	1組
引率者	山崎	五島	高田教頭	田口	加藤
	石樽	森本	古橋	伊藤人	武藤
	古川	安田	岩井	高瀬	福野
	田中	太田	前田	瀬川	



全国高等学校総合文化祭 岐阜大会に出場

写真部 三年 坂本 晶

今夏、本県において第四十八回全国高等学校総合文化祭が開催されます。このタイミングで、本校写真部の二名の作品が県代表となり、写真部の友達を写した私の組写真もその代表作品に選ばれました。感動の瞬間や大切な想いをカタチにして表現できるのが写真の魅力です。普段は校内や河原に出向き、撮影をしたり、チームで組写真を作成したりと幅広く活動をしています。学年や性別関係なく和気あいあいとした雰囲気なかで、撮影方法を教えあったり、違う視点から指摘し合ったりして互いの技術を向上させています。

ぎふ総文2024では、各県の代表の人達と交流する機会が得られるので、より写真の知識を深め、写真への関心を高めたいと思っています。また、岐阜県の魅力を十分に伝えることができるように、しっかりと準備し、関わっていききたいと思っています。

58

伝統芸能にふれて

後期文化委員長 小熊 潤

今回の芸術鑑賞会では落語、色物に触れました。

落語は私たち高校生にあまり馴染みのない文化で、実際に見たことがあったという生徒はかなり少ないと思いますが、演者さんの巧みな話芸や親しみやすい空気感もあって、会場は常に笑いに包まれて賑やかな雰囲気であちがっていました。

始まる前は、「あまり知らない落語を楽しめるのか、」と心配する声もありましたが、始まってすぐに会場の全員を巻き込む参加型のお話があったり、メインの演目を高校生にも伝わりやすい表現にしてくださったりと、沢山の工夫が詰まっております。貴重な経験ができました。

今回の芸術鑑賞会では、皆さんは本当に貴重で実りのある体験をし、伝統的な文化の尊さ、よさを再確認することもできたと思います。これを機に様々な文化に親しみをもって、日々の心豊かな生活につなげていきましょう。



清流の国ぎふ総文2024

写真部

3年 坂本 晶

今夏、岐阜県で開催された全国高校総合文化祭にて、写真部全員が生徒実行委員に任命され、全国大会の生徒交流会・撮影会などを企画運営することとなりました。連日猛暑が続くなか、生徒交流会で披露することにしたオタ芸ダンスの練習に勤しみました。本番ではキレイのダンスに会場が大いに盛り上がり、クイズ大会でも他県の人達との距離がぐっと近づきかけになりました。撮影会では、高山市までの道中を有意義な時間になるように、様々な工夫をこらし、ガイドとして完璧な動きができました。県代表作品となっていた私の作品は、優秀賞という誉れな賞をいただくことができました。これから魅力的な写真が撮れるように写真部全員で邁進していきます。



将棋部

大熊 航平

私は総文祭に出場し、他県の代表との交流が印象に残っています。囲碁は勝敗がはっきりと決まる競技ですが、そのあとに相手を高め合う検討の時間が何よりも囲碁の魅力的な点だと思っています。

囲碁のことはもちろん、離れた場所に住んでいるからこそ方言や名物などの話でとても盛り上がりました。年齢や性別が全く影響しない競技だからこそ、全員が楽しめるのだと思います。今後もコミュニケーションを広げ、多くの人と交流していきたいです。



音楽部

音楽部 林 凌平

僕たち岐阜県音楽部は、「清流の国ぎふ総文合同合唱団」として岐阜県内の他の音楽部と切磋琢磨しながら活動してきました。今年は岐阜県が総合文化祭のホストということもあり、全国から訪れる他県の参加者を迎えるため、様々な準備を行いました。

舞台の設営や誘導といった作業はどれも簡単ではありませんでしたが、他の高校と協力し合い、効率よく進めることができました。また、舞台づくりや進行の準備など、みんなで役割を分担し、成功に向けて取り組んできた結果、本番では多くの方々が楽しんでくださったっている様子を見ることができました。

この全国規模の総合文化祭は、私たちにとって特別な経験であり、思い出に残る充実した夏休みとなりました。



生徒実行委員会

2年 加藤 優奈

この夏行われた清流の国ぎふ総文2024、私はその生徒実行委員をしていました。活動は1年前から始まり、私の所属する総務委員会ではおもてなし弁当やおもてなしメニュー、ローソンコラボ商品の制作など、いろいろな視点から話し合い、クリエイティブな活動ができました。

総合開会式やバレーのブレ大会や大会当日は、千個以上ある2種類の弁当を配りきるなど1人1人の役割が大きく大変でしたが、補助員の子も含め何度も打ち合わせをしてやりきることができました。

実行委員を通して、面識のなかった他校の子達と考え話し合いながらアイデアを形にでき、本当に貴重な経験になりました。また総合開会式終了後の誘導中、来てくださった方からたくさん称賛の言葉をいただき、周りの実行委員もみんな達成感に満ちた顔をしていて、大変だけだよってよかったと思える楽しく充実した時間でした。

ぎふ総文に協力してくださったみなさんありがとうございました！

高 岐 高 だ よ り

第158号

令和7年3月1日

岐阜県立岐阜高等学校
PTA会長 宮崎征一郎

印刷/ヨツハシ(株)
題字/筑間 敏博

CONTENTS

●「逆算の思考」と「自分への信頼」	学 校 長……p1
●祝 ご卒業	PTA 会 長……p2
●卒業によせて	3年次副委員長……p2
●ノブレス・オブリージュ	3年次委員長……p2
●令和7年度コース選択・科目選択の結果	教 務 部……p2
●人口減少時代を生きる	進路指導部……p3
●大学入学共通テスト自己採点結果	進路指導部……p3
●2025年度大学入試出願状況(現役生のみ)	進路指導部……p4
●大学入学共通テストを振り返って	進路指導部……p5
●強く逞しく	3年次主任……p6
●3年間の思い出	3 年 次……p6
●3年間皆勤賞・同窓会幹事	3 年 次……p6
●グローバルリーダー養成事業	進路指導部……p7
●第二回・第三回 学校運営協議会報告	教 頭……p7
●部活動の主な成績・活動	特別活動部……p8



▲水垢離▶



ここで改めてその内容を記して、卒業を迎えた皆さんへの「はなむけの言葉」としたいと思います。

大谷選手は昨年、史上初の偉業「50・50」を達成しました。そして翌日の新聞には、かつて日本のプロ野球で大谷選手の監督を務めた栗山英樹さんの次のようなコメントが掲載されました。

「翔平は、できるか、できないかでは考えない。彼の頭の中には『やるか』『やらないか』しか選択肢がないんです。」

「できるかできないかだと、できないかもと思って、思考が止まってしまふ。彼はやるかと決めたら、あとはどうしたら実現できるかを『逆算して行動』する。それだけです。」

またこのコメントに続いて、次のようなエピソードも紹介されていました。

「大谷選手はアメリカに行つて、打球を強く速く弾き飛ばすことにフォーカスして、『スイングを速くする』ことをやると決



校 長
石田 達也

「逆算の思考」と「自分への信頼」

め、「筋肉量を増やす」↓「練習方法を変える」と逆算して実行した。」

「メジャーリーグに入団した年に体力測定をしたら、大谷選手は垂直跳びを除いて、全項目でトップだった。周囲はそのことを高く評価したが、彼だけは満足していなかった。1ヶ月後に再び測定したら、垂直跳びの記録が30cm伸びていた。彼は少年のように目標を設定し、クリアのため全力を尽くしたのだろう。」

この記事の見出しは「限界を決めず 逆算の思考」でした。そして私は、その思考の源には、大谷選手が揺らぐことなく持ち続けている「自分への信頼」があると強く感じました。

私たちはどうしても「できるか、できないか」「成功するか、失敗するか」と、先のことを不安に思い、挑戦を躊躇したり目標を諦めたりしてしまいがちです。

今後、皆さんには、大谷選手のように「やる」と決めた目標を実現するため、冷静な『逆算の思考』と揺るぎない『自分への信頼』を持って、もし失敗してもそれを糧にして、常にプラス思考で力強く前へ進んでいってほしいと思います。

卒業後は、新しいステージで新たな挑戦の一步を踏み出していくこととなります。もし不安になったとき、弱気になったときには、岐阜高校で友と切磋琢磨した日々を思い出し、それを勇気に変えて、臆せず挑戦を続けてください。

皆さんが「百折不撓 自强不息」の精神のもと、高い志を胸に大きな飛躍を遂げ、将来、日本や世界をリードするグローバルリーダーとして、各分野で大いに活躍することを期待しています。

大学入学共通テストを振り返って（自己採点後の感想文より）

国公立大学（理科・類志望）

まず、共通テストを無事終えることができたこと、また二次試験の土俵に立てることができたこと、自己採点結果だったことに「安心しています。僕は二次試験の対策にほとんどの時間を割いていたので、共通テスト対策をしたのは授業内の演習と本番前の二日間だけでいい。そのため不安はあり、本番一日目は胸が痛む程緊張しました。その中で、概ね見込み通りの結果になって本当によかったです。ここからは共通テスト終了まで僕が大切にしていた、「目の前のことを一つずつ着実にこなす」ということについて書きます。本番の前日までは「とりあえず試験場に無事到着出来たら勝ち」と思うようにしていました。忘れ物などで0回戦敗退（実際はそうでもない）さえ避けられればよいと、ハードルを低くして考えていました。本番の大緊張の中でも焦りすぎず着実にこなせたので、僕はこの考え方は助けられたような気がします。また、誰かの参考になるかもしれないので、今度二次試験を見据えつつ、着実に取り組んでいきます。

国公立大学（農学部志望）

本当に緊張しました。一日目の朝はお腹が痛くて、勉強もままならなかったです。受験票の写真にシールを貼るとき、手が震えてずれてしまいました。しかし、だんだんと自分を俯瞰できるようになってきました。途中で「来年の受験生はこれを過去問として解くのだな」と思ったり、「これで予想問題も作りやすくなって、実用的文章の勉強がしやすくなる」と思ったりして、あー！集中しないぞ！！となりました。前日の校長先生の、ゆっくり大きく歩くというアドバイスが本当に効きました。焦ってこけてしまったり、やけどしうなになったりしましたが、そんなときに校長先生の「ゆっくり落ち着いて」という言葉を思

い出すようにしました。後輩のみなさんに向けた言葉は、「ゆっくり落ち着いて」ということです。歩く速度を落とすと気持ちが落ち着きます。また、一日目の夜は意外と時間がありませんでした。ざりざりにしようと思ってもできないかもしれないので、準備をしつかりして落ち着いてください！！

国公立大学（工学部志望）

共通テスト二日間を振り返って感じたことは、とにかく怖かったということです。私は共テ前日の夕方くらいに体調が悪くなりました。「明日、自分の実力が発揮できないのではないか」「これまでやってきたことが無駄になる」などさまざまな不安が襲ってきました。そんな中で両親の励ましがとても助けになりました。やはり親はとても頼りになると改めて実感しました。そして、共テ当日の朝にはなんとかコンディションをつくることができました。なんと共通テストを乗り切ることができたので、まずはその自分を称えたいです。自己採点の結果は第一志望の大学のボーダーに達していませんでしたが、自分の志望する大学は二次の方が配点が高いため、それほど悲観的にならなくて良いと切り替えました。後輩の人たちも、共通テストで気落ちするのではなく、二次に向けて全力で努力してほしいです。

国公立大学（医学部志望）

本番と聞くとか何か今までと違う特別なもののようにも感じたけれど、実際に試験を受けてみるとこれまでの共テ模試や共テ特編と何ら変わらないように感じた。自己採点の結果も普段より取れた科目、取れなかった科目の両方があったけど、結局普段の模試と同じような結果に落ち着いた。共通テストを受けて、本番で一番大切なことは「切り替え」だと思う。この切り替えは科目ごとの切り替えでも

あるし、その科目の中の問題の間の切り替えでもある。うまくいかなかった教科があっても普段通りの点数が取れたのは、終わった科目のことは気にせず、次の教科に集中するようになったからだと思うし、大事故の科目がなかったのも、分らないところは捨てて取れるところをきっちり取っていいという姿勢で挑んだからだと思う。共通テストは特有の問題傾向があり、その形式に慣れることや共用のテクニックを身に付けることで得点は伸びると思うけれど、1、2年生は普段の授業や定期テストをきっちりやってほしい。自分の場合、授業や定期テストで基本事項をある程度定着させていたから、共テに必要な技術もひっかかることなく身に付けられたように感じる。部活等で忙しい人も基本事項を徹底してやることを大切にしてほしい。

国公立大学（商学部志望）

第一回の特編から徐々に点数が伸びて自信をもった状態で挑みましたが、本番はやっぱ緊張して思い通りの点数はとれませんでした。特に得点源としていたリーディングで焦っていつも通り解くことができず、結果点数も低かったことが残念でした。しかし、次のリスニングでうまく切り替えられたのと、一日目が終わった後にダメだったところを振り返らなかつたので、他の教科にまでネガティブな気持ちをもちこまずに済みました。本番の緊張は想像以上なので、普段通りの判断をすることがまず難しいです。そのことを念頭におくこと、できなかつた場合の切り替えがとても大事だと思いました。また、一日目が終わったあと、早く帰っても二十時過ぎで、二日目の勉強をやる気力はありませんでした。前日は何もできないことを想定して直前の勉強計画を立てるべきだと思います。私は帰って全く勉強せずに寝て、朝五時半に起きて直前の復習をしました。

国公立大学（経済学部志望）

今までの共テ模試で良い成績が取れていたのに、いつも通りやれば大丈夫だと思っていたけれど、共テの前日はやはり不安になった。部活の大会で、自信があつたのに最後の最後に失敗した思いがフラッシュバックして、悪い結果しか想像できなくなり、なかなか寝られなかつた。当日の朝は、「ただの模試だ」と自分に言い聞かせて、何とか冷静さを取り戻すことができたけれど、苦手な国語が全く分からず、また焦りが出てきて文章が全く頭に入らなかつた。正直、国語は手応えがなかつたけれど、次の教科への切り替えが大事だと言う先生の話を思い出して、満点だと言い聞かせるようにした。そうしたこと、次の英語でも、二日目の教科も、いつも通りの実力が出せた。また、二日目には、試験開始直前に目を閉じて、いつもの教室の様子をできるだけ具体的に思い出すようにしたこと、落ち着いて解くことができた。一日目が終わって、どんなに手応えがなくても、満点だと思い込んだことがその後の教科の高得点につながったと思う。

国公立大学（外国語学部志望）

共通テスト二日間を通して、改めて友達や先生、先輩、家族など、周りの人の支えのありがたさに気付かされた。特にクラスの友達は、演習のときから励まし合ったり、お互いの勉強法を共有したりしながら高め合うことができたし、演習ばかりの毎日でも友だちとくだらないことで笑えることがずっと心の支えになっていた。当日も、私の友達も誰も「不毛な会話をせず、先生の名言「粛々と」を互いに言い合ったり、昼休みにラジカステーションで次の科目に切り替えることができた。ここがゴールではないので、周りの人の応援を追い風に、ここからさらに加速して最後まで駆け抜きたい。

令和7年度 大学合格者数

大学名	合格者数
北海道大	12
東北大	2
秋田大	1
筑波大	6
埼玉大	2
千葉大	4
電気通信大	2
東京大	15
東京外大	2
東京学芸大	2
東京農工大	3
一橋大	1
横浜国立大	5
富山大	2
金沢大	3
福井大	2
信州大	2
岐阜大	34
静岡大	3
浜松医大	2
名古屋大	37
名古屋工大	16
三重大	3
京都大	21
大阪大	10
神戸大	9
奈良女子大	1
岡山大	1
広島大	5
徳島大	2
香川大	1
九州大	5
宮崎大	1
鹿児島大	1
琉球大	3
国際教養大	1
埼玉県立大	1
東京都立大	1
福井県立大	1
岐阜薬大	11

大学名	合格者数
愛知県立芸大	1
名古屋市立大	12
京都市立芸大	1
京都府立大	1
京都府立医大	1
大阪公立大	10
兵庫県立大	1
酪農学園大	4
岩手医大	1
東北医薬大	2
国際医療福祉大	1
自治医大	3
千葉工大	1
東京歯大	2
青山学院大	14
学習院大	1
北里大	1
杏林大	1
慶応大	32
工学院大	2
駒澤大	1
芝浦工大	7
順天堂大	3
上智大	9
昭和医大	4
昭和薬大	1
女子美大	1
聖心女子大	1
専修大	2
多摩美大	1
中央大	33
東京女子医大	1
東京造形大	2
東京理大	61
日本大	3
法政大	13
明治大	47
立教大	7
早稲田大	39
麻布大	1

大学名	合格者数
金沢医大	1
松本歯大	1
朝日大	2
岐阜聖徳学園大	6
岐阜医療科学大	1
愛知医大	8
愛知学院大	11
愛知工業大	1
愛知淑徳大	2
金城学院大	3
中京大	3
中部大	4
豊田工大	9
名古屋外大	3
南山大	48
藤田医大	12
名城大	89
名古屋学芸大	1
京都産業大	1
京都女子大	1
京都薬大	3
同志社大	108
同志社女子大	7
立命館大	121
関西大	8
関西医大	2
近畿大	14
関西学院大	12
兵庫医大	2
福山大	1
久留米大	1
産業医大	1
福岡大	1
崇城大	1
防衛医科大学校	5
防衛大学校	2
海外の学校	1

過年度卒業生も含む

令和7年度 同窓会総会運営委員会 名簿

令和7年4月1日現在

担当部門	卒年	委 員					
運 営 委 員 長	昭和57年	山田 秀夫					
運 営 副 委 員 長	昭和57年	松岡 正人					
	平成 4年	武藤玲央奈					
	平成14年	木村 健太					
事 務 局	昭和57年	◎矢本 哲也	○梶山記久子(兼)				
総 務 部 会	昭和57年	◎梶山記久子	○石田 達也				
	平成 4年	○川瀬 友垂					
	平成14年	○内藤 厳之					
財 務 部 会	昭和57年	◎戸部 久史	○永田 陽子				
	平成 4年	○村瀬 範晃					
	平成14年	○内藤厳之(兼)					
会 報 部 会	昭和57年	◎森田 尚人	○樋口 博久	兼松 陽子	服部美由貴		
	平成 4年	○三宅 理恵	佐々木由起子	遠藤 久志			
	平成14年	○水間 貴昭	阪田 佳子	山口 岳人			
広 告 部 会	昭和57年	◎伊藤 恒夫	○廣瀬 祐子	村井 達也	若園 明裕	齋藤 寿子	田中久美子
		玉護真理子					
	平成 4年	○堀部 拓也	三輪高之(兼)	佐藤 浩之	安藤 量基	和座 雅浩	石川 英昭
		大森真喜子	鈴木 真美				
	平成14年	○後藤健次郎	加藤 武寛	熊澤真理子	藤田 知佳	丸田 明範	道木 明奈
動 員 部 会	昭和57年	◎細川 隆	○近藤かよ子	安達 宗徳	桜木 光俊	川瀬 幸彦	住田 仁志
		金武 健稔	篠田 俊治	松原 寛和	戸田真由美	高橋 晴美	吉原 りえ
		棚橋 玲衣	林 泰敬	野原 広美	宇野 吉浩	大中 和昭	谷上 文祥
	平成 4年	○三和 拓人	安藤 宏	北村 美穂	中島 洋之	尾畑 香織	平工 忠史
		早川 佳穂	小島隆之介	小林 浩之	眞鍋 圭介	加藤 裕章	吉村光太郎
		栗山 尚子	小田切清子	鈴木 亨	金森 香織		
	平成14年	○伊藤 尚逸	加藤 寛子	北村 昌彦	渡邊 正敏	渡邊 将広	
在 京 動 員 部 会	昭和57年	◎豊田 博康	赤尾 幸俊	水崎 幸一	長部 典子	増田 英二	
	平成 4年	○桑原 賢典	細野 恭平	高橋 正章	大野 育正	林 大輔	福田 重子
	平成14年	○田中めぐみ	岸 大	杉山 元規	永井 利幸	中東 直代	脇 亜矢子
会 場 部 会	昭和57年	◎久保田 孝	○加藤由美子	市川 敦子	三神 淳子	丹下奈緒美	鈴木 誠
		山田 美樹	久保田順子	中村 健二			
	平成 4年	○三輪 高之	堀部拓也(兼)	澤田 尚子	水谷直有企	吉村 篤	垣内 優子
		井藤恵理子	浦 珠美				
	平成14年	○安田 和広	秋江 薫里	窪田 匡臣	田所 裕子	服部 淳子	堀 伊積
		李 長賢					
監 査	昭和57年	加藤 厚志					
	平成 4年	後藤 篤志					

※◎=事務局長、部会長 ○=副事務局長、副部会長

応援団 歌

- 一、金華城頭月冴えて
蓋世の英雄信長の
万象すべて沈黙なり
雄図の跡に苔むしぬ
- 二、嗚呼熱血児信長の
ありし昔を偲びては
霸業は夢と消え果てど
健児無量の想ひあり
- 三、熱血受けし一千の
桜の香り身に沁みて
心一つの健児等が
根城構へて百三十余年
- 四、悲壮の風の吹き荒び
校の徽章の桜花
混濁の波逆巻けど
身もて護る健児団
- 五、如何なる敵の迫るとも
破邪の剣をぬき立てば
寄せ来る仇は多くとも
竜車に向う螭螂ぞ
- 六、敵に鬼神の勇あるも
我には紅き血潮あり
仇に天魔の計あるも
からくれなゐを見ずや君
- 七、さはあれ心せ同胞の
桜の花の散るあらば
香りは永き百三十余年
散るその下に死なん哉
- 八、誘ふ嵐に散らされず
朝日に匂ふ桜花
尽くせし心の現はれて
その花の下に我れ立たん

凱旋 歌

- 一、泰山厲と消ゆるとも
我が身に功なかりせば
- 誓つて桑梓に見えじと
出でし華陽の健男児
- 二、されど見よ見よ今はこれ
身に大功の光そへ
- 姿を変えて悠々と
我が大丈夫は帰り来ぬ

令和七年度 総会出席者名簿

来賓		会 員	
在京(首都圏)		岐 中	
岐阜高校同窓会会長		昭和20年卒	
尾関 良平		杉山 幹夫	
(昭和37年卒)			
岐阜市長		岐 高	
柴橋 正直		昭和29年卒	
(平成10年卒)		安江 紀子	
岐阜高等学校校長		昭和31年卒	
小野 悟		野々垣 孝	
幹事学年恩師		昭和33年卒	
江崎 正徳		高安 義英	
中谷 達美		昭和34年卒	
石田 啓介		天野 桂子	
坂井 俊郎		鷺見 貴江	
網野 俊六		安田 仁彦	
小木曾 浩			
加藤 知之		昭和35年卒	
田中 彰		片桐 多恵子	
辻 泰		武内 章	
水野 秀則		平塚 正之	
瀬口 芳彦		安田 洋一郎	
竹中 良典		山内 英通	
秋場 毅			
山本 和志		昭和36年卒	
		今井 春昭	
		松原 基明	
		昭和37年卒	
		岡本 文吉	
		奥野 佳代子	
		初音 三重子	
		古谷 葉子	
		昭和38年卒	
		葛谷 武彦	
		高井 宏康	
		玉井 博祐	
		丹下 忠彰	
		中谷 克彦	
		宮崎 千恵	
		昭和40年卒	
		岩井 弘栄	
		大松 利幸	
		森川 幸江	
		山田 謙一	
		山村 哲朗	
		昭和41年卒	
		石井 正志	
		江崎 雅康	
		桐山 直泰	
		栗本 弘嗣	
		後藤 真一	
		古田 肇	
		水谷 邦照	
		新美 佐知子	
		昭和42年卒	
		則竹 晶	
		山口 隆士	
		昭和43年卒	
		石田 栄	
		岩間 憲三	
		大橋 卓二	
		瀬川 順子	
		昭和44年卒	
		河村 都以	
		松田 英文	
		昭和46年卒	
		木方 伸一郎	
		木村 容子	
		鷺見 博信	
		関谷 啓子	
		土屋 誠子	
		栗野 彰子	
		昭和47年卒	
		大平 高司	
		後藤 寿彦	
		丹間 泰郎	
		森岡 宏行	
		昭和48年卒	
		小川 晃	
		杉山 保幸	
		鷺見 卓	
		服部 哲明	
		山田 伸	
		昭和49年卒	
		杉山 正裕	
		梅沢 敏郎	
		橋詰 芳範	
		遠藤 宏治	
		水谷 健	
		水野 耕司	
		三宅 雅之	
		昭和50年卒	
		清水 富士夫	
		園部 利彦	
		竹内 淳二	
		村瀬 幸雄	
		昭和51年卒	
		伊藤 武	
		市橋 正樹	
		木村 昭孝	
		近藤 至徳	
		神谷 眞弓子	
		坂井田 勝治	
		佐藤 通彦	
		棚橋 功史	
		堀 聖嗣	
		松久 卓	
		矢嶋 茂裕	
		山口 正人	
		昭和52年卒	
		野原 正美	
		平光 恵美子	
		昭和53年卒	
		竹中 浩一	
		中風 明世	
		藤澤 尚樹	
		吉田 敦	
		吉田 万里子	
		昭和54年卒	
		赤石 成徳	
		伊在井 みどり	
		川尻 智子	
		稲垣 朋絵	
		水野 朱美	
		杉山 文康	
		昭和55年卒	
		上野 晃	
		細川 育子	
		堀 貴雄	
		朝居 康浩	
		加藤 祐八郎	
		森岡 邦泰	
		安田 章男	
		脇田 昌也	
		佐伯 淑子	
		佐々 美佐子	
		昭和56年卒	
		上村 修一	
		遠藤 康之	
		加納 正嗣	
		唐沢 理恵	
		大森 康二朗	
		三尾 剛志	
		小酒井 多会子	
		奥田 勝彦	
		宇野 美津子	
		佐々木 佳代	
		古川 真一郎	
		北村 多佳子	
		村松 陽子	
		昭和57年卒	
		石田 達也	
		小野木 隆浩	
		栗本 峰宏	
		杉山 照幸	
		華井 智加朗	
		毛利 尚樹	
		渡邊 元博	
		青木 智英	
		奥田 康三	
		川瀬 幸彦	
		香田 弘司	
		住田 仁志	
		豊田 博康	
		松野 功	
		三浦 康弘	
		武藤 直一	
		吉野 善晴	
		金武 健稔	
		篠田 俊治	
		二村 学	
		松原 雅人	
		操 良	
		若園 明裕	
		市川 敦子	
		寺垣 靖子	
		山田 由郁里	
		山中 賀ゆり	
		赤尾 幸俊	
		伊藤 恒夫	
		松原 寛和	

水崎 幸一	刑部 早苗	玉護 真理子	西山 光知子	昭和61年卒	平成4年卒	武藤 俊博	鈴木 真美
山北 宏	永田 陽子	後藤 数枝	太塚 茂記	国井 重宏	青山 陽	吉村 篤	加藤 節子
草野 恭子	樋田 光代	服部 美由貴	林 美智代	早川 徹	坂井 正宏	澤田 尚子	垣内 優子
梶山 記久子	棚橋 玲衣	井上 裕二	松本 智津子		佐竹 真一	林 珠美	福田 由美
加藤 由美子	廣瀬 祐子	大中 和昭	服部 弘典	昭和62年卒	佐藤 浩之	福田 重子	水野 祐佳
戸田 真由美	石樽 健二	田中 基嗣	馬淵 廣美	澤田 大輔	平工 忠史	正治 聖子	村井 かほ
市村 みゆき	江川 和紀	清水 千尋	長尾 恵子		眞鍋 圭介	安藤 量基	浅野 学
三神 淳子	国定 誠	谷上 文祥	太田 京子	平成元年卒	石川 英昭	加藤 裕章	塩谷 俊昭
野田 裕子	鈴木 誠	中村 健二	林 輝彦	広瀬 修	尾関 英克	高橋 正章	小川 慎司
富田 和江	西脇 功	福島 秀一	飯沼 真理子	森嶋 将隆	佐村 一洋	坂 隆裕	奥村 一也
江崎 浩志	林 泰敬	森田 尚人	市川 ゆかり	土屋 勝裕	藤川 武彦	中原 幸洋	川瀬 隆男
熊田 浩二	小川 智恵子	奥村 美智	尾藤 喜昭	寶壺 貴之	源 利文	水谷 直有企	小島 隆之介
徳重 真	山田 美樹	菊池 磨奈美	野々垣 貴美子		新見 拓也	大野 恵子	白木 応実
野村 徳彦	竹内 小織	馬場 凡恵	榊原 清孝	平成2年卒	山口 裕章	早川 佳穂	田口 順司
広江 淳良	野原 広美	木本 茂子	渡辺 泰宏	石川 貴之	石崎 直孝	清水 祐代	玉木 孝佳
山田 秀夫	兼松 陽子		澤田 悦子	三嶋 芳紀	大久保 彰律	柴田 ゆうか	土田 豊
高橋 晴美	梅田 佐和実	昭和58年卒	坂本 美紀子	古田 直樹	大西 護	浅井 稔博	武藤 玲央奈
石上 香織	北村 あずさ	藤井 智幸	江上 裕子	長瀬 嘉子	小林 浩之	大野 育正	村瀬 範晃
長部 典子	足立 龍司	森川 賢二		汲田 大	坂井 敏郎	黒川 淳一	安田 太朗
近藤 かよ子	宇野 吉浩	河田 誠	昭和59年卒	西澤 征平	白橋 耕太	小林 篤史	遠藤 久志
田口 路子	大西 公靖	鳥澤 昌紀	柴田 朋浩	小本 曾 陽子	飛田 憲昭	澤田 昌久	小川 修史
橋本 みちよ	加藤 厚志	西田 泰幸	新居 晶子	平成3年卒	初音 俊樹	溝口 公士	片桐 正貴
朝居 宏次	橋田 貴純	山田 誠	高橋 浩子	小川 輝洋	林 大輔	吉村 光太郎	鬼頭 貴士
久保田 孝	細川 隆	秋山 晋	横山 絵里	山藤 雅之	堀部 拓也	河合 亜希子	安原 久満
戸部 久史	矢本 哲也	安藤 弘道	成瀬 幸子	瀬古 聡	松井 基勝	栗山 尚子	尾畑 香織
長谷川 素永	和田 百合	石原 幸喜		佐藤 佳子	松原 浩之	川瀬 友亜	三宅 理恵
樋口 博久	加藤 聡子	今井 巧	昭和60年卒	大野 貴志	三輪 高之	井藤 恵理子	青山 正和
藤沢 暁夫	齋藤 寿子	渡邊 勇	安江 紀裕	廣瀬 めぐみ	三和 拓人	鬼頭 陽子	浅野 宏明
松岡 正人	久保田 順子	谷畠 進太郎	林 克彦	内藤 真澄	和座 雅浩	堀 静香	神谷 正治
吉原 りえ	田中 久美子	森屋 和喜	加藤 芳洋	小石 亜希子	桑原 賢典	森崎 由喜子	近藤 宗由
葛城 久子	上原 誠	山口 和也	後藤 誠一郎		阪本 純一	安西 亜矢子	松岡 孝史
松山 れい子	杉山 淳	今井 奈穂美	浦山 晶子		田丸 真也	篠田 智恵	森 秀人
丹下 奈緒美	増田 英次	大須賀 千尋			辻 耕二	鈴木 亨	金森 香織

河瀬 まり	西部 智子	平成13年卒	渡邊 将広	寺町 健	木村 武嗣	平成24年卒	岐阜高校同窓会担当
高橋 杏子	岡本 達明	高橋 清孝	辻 望	丹羽 亮平	高橋 正典	伊藤 礼人	の先生
宮川 ともみ	鈴木 康也	佐橋 雄介	荒川 麻衣子	野原 敏広	田邊 康師	亀淵 裕	伊藤 誠司
伊藤 一郎	早矢仕 英史	四ッ橋 憲彦	田所 裕子	森 健一	宮田 知明	齋藤 奏磨	(昭和58卒)
後藤 篤志		藤川 貴雄	矢島 つかさ	荻谷 有美	大関 磨美	高橋 克弥	古川 真哉
後藤 泰彦	平成6年卒		横山 希	瀬尾 多絵	猪又 理恵	田中 真由子	(昭和59卒)
細野 恭平	木田 陽子	平成14年卒	安藤 慎一郎	道木 明奈	田中 めぐみ	山田 遼	松井 裕子
堀 哲弥	恩田 昌直		伊藤 尚逸	佐々木 葉月	岩田 剛		(平成8卒)
渡辺 克樹	馬淵 智幸		河村 純	服部 淳子	奥村 彰規	平成27年卒	棚橋 誉久
大森 真喜子		太田 智彦	長屋 雄大	林 寛子	川島 佑介	武藤 快	(平成9卒)
白木 美保子	平成8年卒	加藤 隆	早川 裕也	安部 真弓	小林 寛樹		遠藤 久美子
佐々木 由起子	三浦 陽平	汲田 幸司	武内 智康	浅野 浩隆	坂井 裕介	令和3年卒	(平成14卒)
小田切 清子	北川 恭正	小島 真彦	領木 慎一	伊藤 一平	松山 裕次	鬼頭 世鈴	八代 周士
洞田 恭子	瀬川 典秀	内藤 厳之	加納 麻衣子	井上 健人	阪田 佳子	藤井 雄太	(平成17卒)
	安田 茂宏	仁科 穰	古谷 迪子	金武 誠	桜井 結香		石樽 啓乃
	岩本 秀巳	春田 晃太郎	藤広 麻由	角 雄記	渡辺 薫	令和4年卒	(平成19卒)
松原 啓泰	竹中 雅史	矢野 好輝	宇野 納子	永井 利幸		武藤 伊呂波	武藤 雅紀
白木 雄一郎	服部 晋一郎	渡邊 正敏	田中 祐美子	堀 伊積	平成15年卒		(平成24卒)
長谷川 友哉		李 長賢	神谷 友康	水間 貴昭	永瀬 洋平		
森本 貴生	平成9年卒	加藤 武寛	岸 大	長谷 晃子	加納 裕久		
木野村 茂樹	川村 正憲	川井 正統	後藤 健次郎	坂本 実希	杉野 勇太		
小林 直樹		木村 健太	林 雅之	脇 亜矢子	徳山 錦蘭		
大徳 康司	平成10年卒	窪田 匡臣	丸田 明範	秋江 薫里	横山 真之祐		
加藤 規子	乾 俊哉	中島 洋岳	伊藤 栄里子	堀 仁美	奥村 崇之		
杉山 千世	坂井 研治	古川 侑	熊澤 真理子	山田 恭子	奥住 亜矢子		
浅野 拓郎	井上 愛	眞鍋 和幹	進藤 裕子	中東 直代	小川 結加		
伊藤 知子		安田 和広	高木 梓	中村 有里子	飯沼 威雄		
尾関 光彦	平成12年卒	井深 佑哉	藤田 知佳	加藤 拓也			
北川 輝信	渡邊 祐輔	大澤 大輔	名畑 泰子	山口 岳人	平成19年卒		
後藤 栄一郎	辻本 真範	北村 昌彦	南谷 昌代	佐合 俊彦	南谷 健太		
浪上 主税	岡田 英之	佐藤 勇人	大島 惇司	杉山 元規			
古田 希雄	玉井 裕也	速水 智章	篠田 貴志	辻本 麻妃	平成21年卒		
梶山 博史		松井 裕美	白木 之浩	大原 真須美	橋爪 大		

編集後記

▽広告・協賛の 御礼

広告・協賛を賜りました皆様のご厚情を掲載させていただく会報を無事、完成させることができましたことを、ご報告させていただきます。

なお、ご紹介順序は会報の構成上、原則的に順不同とさせていただきます。何卒ご理解いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和七年六月一日

岐阜県立岐阜高等学校同窓会
令和七年度総会運営委員会

会報部会の仕事をするようになった時に、まず念頭に置いたのは、会報が配られる同窓会総会には様々な世代の卒業生が集まることでした。そこで今回の会報作りでは二つのことを目指しました。

一つは幹事学年以外の人にも興味を持って楽しく読んでもらえること。このため、どの世代にも関心の高いテーマやタイムリーな話題を取り上げたいと思いました。

もう一つは世代を超えて経験を伝えること。仕事をはじめ、家庭や第二の人生など様々なライフステージにいる人に経験者からのメッセージを届けたいと思いました。このため、何人かの方にはプライベートな事柄に踏み込んだ寄稿をお願いしました。

こうした方針がよかったかどうかは正直言って、よくわかりません。もっと懐かしい気分で読める、思い出を共有できるような会報が正解だったのかもしれませんが。しかし、こんな言い訳はさておき、寄せられた原稿の一つ一つは大変に読み応えがあるものでした。

原稿が送られてくるたびに、書かれた方の経験や知識の深さ、難しい事をわかりやすく伝える表現力、それぞれの個性がにじみ出る語り口などに驚き、岐阜高校卒業生の人材の厚みに圧倒される思いでした。会報は会報部会が作るのではなく、寄稿いただいた方々の力で出来上がっていくものだ実感しました。長年のご無沙汰にもかかわらず寄稿を快諾いただいた恩師の方々、それぞれの仕事や活動が忙しい中、貴重な時間を割いて執筆いただいた同窓生の皆様に心より御礼申し上げます。

そして、特集2「校史への招待」では同窓会事務局の園部利彦事務局長に本当にお世話になりました。「校旗の色が思っていたのと違う」などという非常識な疑問に丁寧に向き合い、校史に関する様々な知見や資料を提供していただきました。

表紙づくりでは昭和五七年卒の鈴木誠さんに監修という名目で実質的にはほとんど一からデザインしてもらい、用紙の選定などでも専門的なアドバイスをいただきました。

さらに、会報作りを自由に進めさせてくれた実行委員会事務局の皆様、本業ではリーダーとして忙しい中、原稿集めに奔走してくれた各学年の会報部会の皆様、紙面のレイアウトや校正に尽力いただいたヨツハシ株式会社の皆様に改めて御礼申し上げます。

令和七年度 会報部会長 森田尚人

令和七年度
岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会

会報

■発行

令和七年八月一日

■編集

岐阜県立岐阜高等学校同窓会
令和七年度総会運営委員会

■印刷

ヨツハシ株式会社